

森山泰太郎『民俗学研究所留学日誌』

Studying-Abroad Diary to Folklore Research Institute by Taitaro Moriyama

KOIKE Junichi

小池淳一

解題

ここに紹介するのは、青森県津軽の民俗学者、森山泰太郎^①（大正四年・一九一五〜平成一五年・二〇〇三）が記した昭和二五年六月から八月までの民俗学研究所への内地留学の記録である。当該資料は大学ノート六七頁にわたって、ペン書きで昭和二五年六月二日から八月二八日までの動静を記しており、『留学日誌』と題されている。約三ヶ月にわたる地方民俗研究者が見た民俗学研究所の活動のドキュメントである。

留学の舞台となった民俗学研究所は、昭和二二年三月に柳田國男の書齋を提供するかたちで設置されたもので翌年四月に財団法人となり、戦後の民俗学の核となった組織であった。『民俗学新講』（一九四七年）、『全国民俗誌叢書』（一九四九〜五一年）、『民俗学の話』（一九四九年）、『民俗学辞典』（一九五一年）、『民俗選書』（一九五四〜五六年）、『総合日本民俗語彙』（一九五五年）などといった戦後の民俗学の発展を示す出版物を残し、昭和三二年四月に解散した。解散の理由は文化人類学の石田

英一郎による民俗学は広義の文化人類学に包摂されていくべきであるという所説に対する反論が乏しいことによる柳田の失望が背景にあるという見解と経済的な事情によるものだという見解とがある^②。

森山泰太郎の留学は、昭和二五年八月の『民間伝承』第一四卷八号の「民俗学研究所報」に「同人消息」として

○青森県の国内留学生として、弘前高校教諭森山泰太郎氏は六月十日から三ヶ月間研究所で勉強されることになった。研究題目は「津軽地方の海村生活における特殊な習俗の研究」。

と紹介されている。

後年の森山の回顧では、戦後の世相が定まるにつれて民俗学を学び直したいという思いから、柳田が元気なうちに日頃の疑問を残らず教わろうと、昭和二十五年の夏休みを入れて三カ月、研究所に研究員として学ばせていただいた、と述べられている。その際は「前年までに私は、

津軽半島周辺の漁村習俗を採集していたので、それらを全国的な資料と比較するのが主目的」であったといいい、この時にまとめたのが、「津軽の海村」というノート三冊の記録である。⁽⁴⁾青森県津軽地方に居を定め、みちのくの民俗研究に取り組んでいくことになる森山の若き日の学びの記録といえよう。

ここではそうした戦後民俗学の出発の時期に、地方の研究者が柳田國男の懐に飛び込み、どういった刺激を受け、どのような活動をしたのかを知るための、そして日本民俗学形成史の「こまを語る資料」として、『留学日誌』を紹介して、民俗学史研究に供したいと考えた。⁽⁵⁾ここでは内容を端的に示すために「森山泰太郎『民俗学研究所留学日誌』とした。

この留学期間の森山の動向を大まかに紹介しておこう。

六月二日 研究所に挨拶。岸本英夫（東大教授。宗教学）の米国帰朝談に臨席。

同月二日 シェーファー（上智大学）と柳田との懇談に臨席。

同月二五日 民俗学研究所第五〇回研究会に出席。⁽⁶⁾

同月二九日 ダニエル（ロンドン大学教授）、ドーア（東大研究生）と柳田との鼎談に臨席。

七月七日 成城学園社会科学研究会に臨席。

同月九日 民俗学研究所談話会に出席。⁽⁷⁾

同月二〇日 農林省勤務の女性二名と柳田との懇談に臨席。

同月二三日 三谷栄一の仲介により、山梨郷土研究会民俗部会の会合に出席。

同月二七日～二八日 能田多代子の静好寮に泊まり、「南風と交易船」を執筆。⁽⁸⁾

同月三十一日 月例談話会で津軽の海村生活について報告。

八月二三日 民俗学研究所談話会に出席。⁽⁹⁾

同月一七日 「津軽の海村」ノート三冊まとまる。

同月二六日 柳田に帰郷の挨拶。

同月二七日 帰郷、翌朝弘前に帰着。

森山はこうした民俗学研究所における研究会や懇談の内容、さらにそこにおける柳田の発言について細かく記録しており、この点がこの日誌の大きな魅力といえる。今後、こうした記録とそこから導き出せるさまざまな問題について考究していくことを期したい。今般は御遺族の諒解を得て、日誌の全貌を提示し、広く学界に供するとともに今後の検討の第一歩としたい。

最後に本資料の現蔵者で公開をお許しくださった御遺族、水沢忠明氏と翻字にあたって御教示を賜った小熊健氏に深甚の謝意を表したい。また青森県史編さんグループの御高配にも感謝申し上げる。

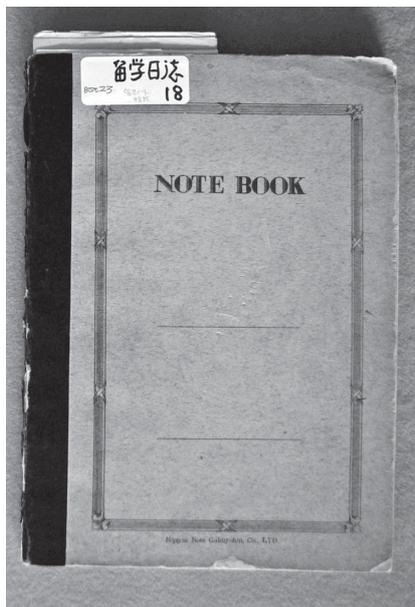
註

(1) 森山泰太郎は大正五年（一九一五）青森県弘前市小人町に生まれ、のちに袋町に移った。県立弘前中学を経て國學院大學に学び、小学校代用教員、中学校教員を経て、応召。復員後、県立高等学校で教鞭を執り、退職後は東北女子大学教授を務めた。青森県における文化財関連の委員も数多く務め、特に民俗分野において長年、指導的な立場にあった。平成一五年（二〇〇三）没。

主な業績としては『津軽の民俗―郷土を科学する―』（一九六五年、津軽新報社）、『砂子瀬物語』（一九六八年、津軽書房）、『日本の民俗2・青森』（一九七二年、第一法規）、『北のフォークロア』（一九九一年、北方新社）等の専著の他に、『日本庶民生活史料集成』（第一六巻）における平尾魯僊（魯仙）の『谷の響』などの注解作業や『日本の食生活全集②・聞き書青森の食事』（一九八六年、農文協）を中心となつてまとめたといった事績もある。民俗学の領域以外の著作としては『奥の細道要解』（一九六〇年、有精堂）、『野沢如洋伝』（一九七四年、野沢如洋顕彰会）などがある。

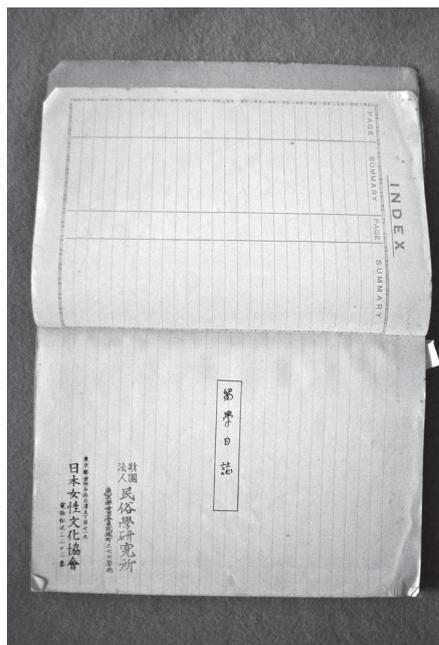
なお、森山の追悼記録としては『青森県の民俗』三号（二〇〇三年、青森県民俗の会）に「追悼 森山泰太郎先生」がある（一三五～一四七頁）。

(2) 民俗学研究所の動向と民俗学史上の位置づけについては、杉本仁「民俗学研究所の発足」（柳田国男研究会編『柳田国男伝』、一九八八年、三二書房、九六八～九九三頁）、「民俗学研究所の解散」（同前、一〇八九～一一〇六頁）、牧田茂「民

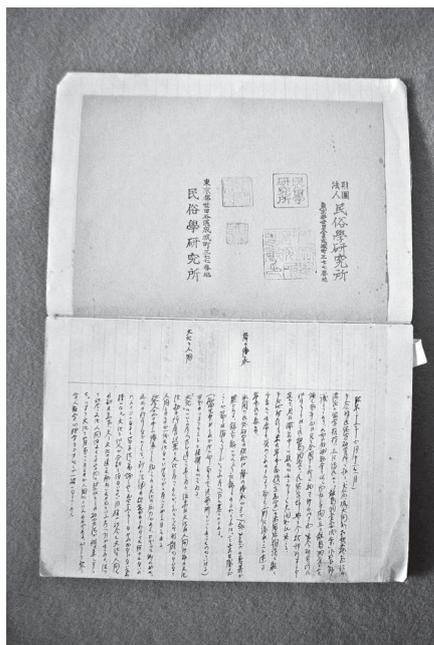


ノートの表紙

- 俗学研究所」(野村純一ほか編『柳田國男事典』、一九九八年、勉誠出版、四六四～四六八頁)等を参照。
- (3) 森山泰太郎「先生と私」(『北のフォクロア』、一九九一年、北方新社、二二六～二三八頁)、二二六～二二七頁。
- (4) 森山泰太郎「私の履歴書―過ぎし日の戦場とロマン」(前掲註(3)『北のフォクロア』、二五六～二六〇頁)、二五九頁。なお、このノート「津軽の海村」は森山存命中はついに公刊されず、森山の論考執筆に部分的に利用されるにとどまっていた。没後、御遺族の諒解によって『青森県史民俗編資料津軽』(二〇一四年、青森県)に全体を収録し、紹介した。同書の五五〇頁の外崎純一による解説を参照されたい。
- (5) なお、類似の経験と記録を残した人物として長野県の大月松二と齊藤武雄がいる。大月の経験と記録は『伊那民俗研究』(二二～一五号、二〇〇三～二〇〇七年)に「大月松二の柳田國男聴書・滞京日記(1)」「(4)」として紹介されている。齊藤の記憶は「民俗学研究所での一年間―柳田國男先生の足下で―」(『信濃教育』一一七六号〔特集・柳田國男の人と業績〕、一九八四年、信濃教育会、一四三～一四八頁)に述べられている。こうした諸記録との比較検討を今後の課題としたい。
- (6) この研究会については『民間伝承』第一四卷第九号(民間伝承の会、一九五〇年)、四三頁に記録がある。
- (7) この談話会についても前掲註(6)の四三～四四頁に記録がある。
- (8) この「南風と交易船」は『民間伝承』第一四卷一〇号(一九五〇年、民間伝承の会、一四一～一七頁)に発表された。
- (9) この談話会については前掲註(8)の四四頁に記録がある。



日誌の冒頭①



日誌の冒頭②

- 〔凡例〕
- ・ 翻刻にあたっては、仮名遣いは原文のままとし、漢字は特に意味があると思われるもの以外は通用のものに改めた。
 - ・ ノート上部に森山が付した見出しは当該箇所と判断できる位置に「」に入れて本文中に挿入した。
 - ・ 判読できなかつた文字については□とした。
 - ・ 翻刻に際しての注記(小池による)は「」で示した。

森山泰太郎『留学日誌』

財団法人民俗学研究所 東京都世田谷区成城町三七七番地（印）

東京都世田谷区北澤五丁目七一九 日本女性文化協会 電話松沢三三二〇二番（印）

昭和二十五年六月十二日（月）

午後二時民俗学研究所へ赴く。大藤、堀、大間知、和歌森、直江の諸氏に留学の挨拶。上記諸氏にて「離島調査要項案」作製協議しつゝあり。文部省補助金を以て向後三年間に亘る離島調査を実施し本年度は凡そ全国十ヶ所に就き行ふべき由、唯今研究所の仕事としてはこの離島調査と民俗学辞典を今秋刊行する予定にて君の滞在中に校正が出るだらうと大間知氏語る。

午後四時頃より東大岸本教授（宗教学）の米国帰朝談を聴く予定にて出席を奨められたるにより即ち前記諸氏と共に連る。

岸本氏の要旨。

【声の伝承】米国の民俗研究の現状は声の伝承が主で Folk music の収集が盛である。録音版にどんどん記録してゐるが、これは「言葉は残るだらうが節は消えて了ふ」といふ考へ方に基くのである。

（柳田先生はこれが第二部即ち言語芸術といつてゐるものだとはいはる）

日本のフォクリストと提携したがつてゐる。

【文化と人間】「文化」についての考へ方が違つて来てゐる。従来は文化は人間行動の文化活動の所産の結果を文化と考へてゐたが、しかしそんな形骸だけでなく人間そのものが一体文化なのではないかと考へるやうになつてゐる。

社会人の心の中に伝承として残つてゐる文化の圧力がある。日本でも例へば七、五、三、の行事などにしても、別に法律の規定があるわけでも何でもないのに、あの日になると皆子供に着物を着飾らせてお宮参りしな

ければならない気持になる。文化と個人が分別し得ないもので同様に社会も文化も人間も区別出来ず、夫々文化の違つた面だつたのだといふ考へ方が出てゐる。従つて社会・文化・人間何れもその学問の対象としての研究法が似て来て了つた。つまり文化を背負つてゐるのが人間だといふわけである。かうして社会学・人類学・心理学などすべてが一緒になりつゝある。

【文化遺産】文化遺産といふことについても、存在するものはすべて価値のあるもので遺産ではないといふのである。

柳田先生のアメリカ・フォクロアが今後その学的領域を広めてゆくだらうかといふお尋ねに対し岸本氏は恐らく大したものではあるまいと考へてゐる。

柳田先生、

①日本の民族学(傍点)研究などは少し速急だ。国内の分はイスノロジーではやりたくない。实地調査で進みたい。

②日本のものが外国に紹介されなすぎた。この原因には日本人の大和魂といふものか、聞きに来れば教へてやらうといふ考の邪魔もあつた。

岸本氏の話にアメリカでは十七大学の講座にフォクロアが入つてゐて、カルフォルニアのフォクロア・ソサイティーがよかつたといふ。

【忘れられた日本】結局日本は知られてゐない。「忘れられた日本」であり、「世界の裏長屋」だつたといふ自覚をもつた。

○

岸本氏を囲む座談会終了は午後五時半頃にて、同氏辞去後柳田先生に御挨拶し留学中の御指導を御願ふ。先生より津軽の海村資料を纏める仕事を滞在中の第一目標にすること、「津軽民俗」もむしろ島根叢書の如きブック・フォームにした方がいゝではないかといふお話あり。

柳田先生への御土産は弘前市百石町佐々木氏の残月おぼろ柚子の詰合せ

一折なり。先生は水曜日の集會に皆で頂かうと言はる。井之口章次氏より刺をうく。六時辞去。

六月十三日（火）

大雨ノ為終日籠居

六月十四日（水）

午後世田谷北沢五ノ七一九高瀬兼介先生を訪問。高瀬、鈴木好両氏に逢ひ留学中寄宿の件依頼。乃ち日本女性文化協会事務所に國學院大学夜間部学生鈴木実君と同居自炊のこと、する。

【鱈ヶ沢浪華煎餅】「熊野舟」夕刻仙秀先生を訪問。鱈ヶ沢の浪華煎餅は金沢の壽煎餅と同一物にて北国船の搬入せしものなるべし及び同じく鱈ヶ沢名物鯨餅のこと、紀州熊野の熊野舟といふもの彩色せる玩具にて祭祀に因み出すものとかや。松浦舟といふものもあり例の西浜鹿島舟との関連ありや否や。なほ魯仙門にて黒石山本仙室の家に魯仙の遺作あるべしと云はる。

この日仙秀先生摹写「旧藩弘前風俗画」一巻魯仙原図のものを佐藤節翁写し由長谷川進先生藏一巻今回予の上京を記念し贈る旨巻末に記されて贈ふ。

六月十五日（木）

世田谷区北沢五ノ七一九日本女性文化協会事務所に移転。但し起居は明日より。午後研究所に赴き、直江氏と語る。研究所の蔵書、カード、資料一切の自由閲覧利用を許され予の来所日につき相談。直江氏は月木土、大藤、大間知両氏は月、水、金夫々来所の由に付、予は一応水、木、土と原則的に来所すべきことを約す。

【シラといふこと】同氏と語りし中に、花祭にしら山といふこと見ゆ。

上北百石町のおしら口寄せは盛岡系のものと思はる。沖縄ではシラとは誕生、生れ変りのことを云ふを考へればおしら神の内容も之に関連なきや等。

六月十六日（金）

午後日本女性文化協会に移り留学中の居を定む。同宿鈴木実氏。

発 東京通信（1）桜庭武則（1）

高藤義雄、松木明、神良治郎、指導課松本主事、幾代

六月十七日（土）

正午研究所に赴く。千葉徳爾氏と会ふ。漁村語彙閲読。先生は国語研究所の招聘にて講演の為不在。高橋さんに弘前鳩笛（鎌田さんの分も）を贈る。大山の乾餅先生に取次を乞ふ。四時半まで在所。

発 手塚勝治、木村勝代、高藤寿子、山内耕子

六月十八日（日）雨後止

朝より執筆。夜に至り「コンブハマの話」「鱈漁の話」を纏む。昨年の初稿更に布符す。夕刻弟来る。

発 下山俊三 東奥年鑑、オシラ講写真発注

六月十九日（月）雨夕刻止

朝より「鱈漁の話」書きつゞく。昼「いづみ」の仕事少々手伝。午後より「禁忌・沖詞」にかゝり夜十一時成る。この間五時頃出雲民俗の会石塚尊俊氏突然来訪、研究所に寄りての帰途にて明日出雲に帰る予定と云。約三〇分対談し東北沢駅頭にて別る。

【金神様の日】因に金神様の日は十一月巳の日といふ。夜八時仙秀先生を訪る。

①西鶴に奈良の山奥で鮫の刺身を食ふことありと見ゆ。真山氏の語彙考証に見ゆ。海陸物資交流の一例か。

②ペリリ日本来航紀行を大槻盤溪訳せしものあり。校合者に「弘前 工藤岩次」と見ゆる由、幸田成行氏の談なれど、定府の士なるべし。

③平尾忠兵衛の姉に北郡橋川中村文吾に嫁しその次男（仙台高校教授と云）に赤石村寺田氏（仙秀先生從兄）の女嫁せしと。

④寛政六年写「松前航路図」一舗借留、下張より出づと。件図越後国沖乗船頭所画也同国蒲原郡水原町小田島儀三郎蔵本同所客舎而寛政六年寅壬十一月晦日武蔵国足立郡大間村福島東雄傳写之」とあり、

東雄は真淵門にて国学を修め榊原氏につき兵学を学びしと。図中「子丑走」「丑走」など記載あり。即ち風を利し航行に便にせしものかと云。

発 葛西やす いづみの件

六月二十日（火）、雨
「海の怪異」書きあげ「海難と死霊」にかゝる。昼「いづみ」事務手伝。

「松前航路図」模写。

受
発 桜井冬樹 浪速煎餅、マスヤの婆さんのこと。

六月二十一日（水）晴
午前「海難と死霊」書上げ十一時研究所二赴、大藤、大間知両氏と西浜

の話する。

鹿島流しのことにつき大藤氏より民傳の秋田・仙北郡の報告あるを教へ

らる。
民傳、アチック奥のしをりを閲覧。

午後二時研究所に上智大学のカトリック教師シェーファー氏来訪、子安神について先生と懇談、以下先生の話。

【子安神の話】子安神は関東特に千葉、茨城、栃木地方に多く見られる。大い大きな道路の次位の道路を歩けば必ず目に映るほどである。

親子地蔵ともいつて母と子と一緒に死んだ時に建てることが多い

この近くでは東北澤と下北澤の間に親子地蔵があつて、これは昭和になつてからの話で、一私がお、は移住して来てからだから一狂人か何かの

遺恨で殺したその霊を弔ふ為だといつた。

一体地蔵は子供が好きだが、子安神の如く子を抱いてゐる姿、あれは別だ。何かそう作らねばならぬ理由があつたらう。子安神といふ言葉は日本語としては変わつてゐて、どうしても古い日本語でなければならぬ。

【子安貝】竹取物語に子安貝があるが、岐阜に子安神といふ神様がある。子安神が地蔵や観音に統合したのは時代の変化で、固有のものではない。

【子安神の祭る日】子安神の祭日は十九日の夜だが、これは十八日が観音の日だからであらう。一体女は男と一日日を違へて祭る。同じ日だと信仰の観念が強まらないからだ。それで子安神を祭るのが十九日だといふ理由は、十八日が男が祭る日だったからだらう。

【十九夜講】関東では十九日夜講といふのがある。正面に観音様を飾つて女だけがこの日楽しく集ふが、恐らく安産と子供が丈夫に育つやうに

といふ願いだらう。そして講員も多くはまだ子供を産み盛りの女達である。

水戸の袴塚で私は見た。浦和附近にもある。栃木の東南部益子の川岸の

畠の道傍に大きな地蔵が立つて子供を抱いてゐる。子供を持つ親の心は同じで、我々もあれを見ると本当に有難いと思ふ。

【子安と犬ソトバ】犬が産をして死ぬと子安と同じ祭り方をする。犬ソトバといつて、之を建てるのは子安神の信者であるから、犬ソトバと子安神は何か関係があらう。

【母子神信仰】日本にも母と子 mother & children といふ信仰がある。これは水の信仰と関連して古事記の豊玉伝説などもそう。石田英一郎

君がいま母子神信仰を研究してゐる。

ロシアのステレンベルンが来てこの話をしたら、それはアジアには何処の国にもあるといった。神功皇后と応神天皇、この母子を八幡様などで一緒に祭つてゐるのもその例である。

いま私は大へん面白いことを研究してゐる。昔から海に向ふの浄土といふ思想が日本にあつて、海陸交通が行はれてゐた。

【ニルヤ】 処が田舎にはまだ海の神を祭る処があつて、ニルヤといふ言葉がある。意味はまるで訣らないが、遠い所で東といふ意味もある。

【東方浄土の思想】 太陽の出る方を拝む。つまり東方浄土とでもいふべき思想が古くからあつたのではないかと考へてゐる。ニイラといふ形容詞が沖繩にあつて、これは遠いといふ意味である。例へば井戸の水が底でキラ／＼光つてゐるやうな場合、水が遠くにあると考へてニイラといふ。これと日本の根の国との間に関係がないか、と思つてゐるが、その共通した点は鼠があることである。

古事記に大国主命の話がある。

日本では子安を仏にして地藏や観音と結合させてゐる。

【冬至】 冬至のことがこの頃訣つて来た。つまり祖先を祭る日で同時に稲の収穫に対する感謝の日でもある。稲刈から一十月の間何もせず祭りの物忌みをして、冬至に祀るのである。

【神無月と留守神】 十月は神のない月ではなく、祭りのない月といふことである。この月に祭るのは、エビス（十月二十日）と火の神である。これをルスガミといふ。留守神祭りをする神は新しい神である。

【隠し念仏】 隠れ切支丹といふのがあるが、隠れ念仏といふ信仰がある。岩手の例であるが寺と関係なしに普通人が長老になつて信者の団体をつくつてゐる。これにも洗礼のやうなものがあつて念仏をしながら恍惚状態になると背後からオトリアゲといつて式をする。これは極楽に行くこととお釈迦様が約束してくれるといふことださうだ。之は決して外には

現さない。つまり隠れて人に知られぬとか、人と一緒にないと考へてゐる所に宗教的な感動があるのだらう。今日の如き信仰が自由になつた世の中に態々隠れてゐるといふのもかうした理由からであらう。

井之口章次氏の紹介にて國學院大学文学部宗教研究室助手平井直房氏より刺を受く。

六月二十二日（木）雨時々止。

研究所着十一時半。直江氏、小生と高橋、鎌田両嬢とのみなり、「民傳」旅傳より資料を拾ひ大いに益す。民傳の具森格正氏「津軽漁村語彙」頗る面白し。但し採集地は青森野内附近と思はる。

【杖の話】 杖の話中国地方大田植の総指揮者（サゲと云）が竹の杖をもち、さんばい様神憑の代とすること旅傳に白田甚五郎氏の報告あり。

【さんこ狐】 同じく能田女史五戸の狐話を物されし中に中の沢のさんこといふ小狐あり。こゝにもさんこの眷族を見る。

【巡拝の信仰】 直江氏と談話す。鱈ヶ沢の七所めぐりの話を中心にウチ神やウブスナ神より次第に信仰の対象領域を広める信仰過程について語る。三十三観音巡拝などと同じなるべしといふと直江氏も然なり、佐渡にも島内巡拝のことあり、比較的新しいものか、又は古くよりの要素あるべきか両面より考察の要あるべし。おしらが歩きたいと告げてこれを背負ひて廻る歩き巫女、祝言を述べるホイトなど同じことなるべし。多く収穫後のこと多しと云。

【八月十五日の問題】 黒崎の獅子頭は熊頭なること及び八月十五日獅子納めに鳥毛を流すことを述べしに、八月十五日は問題の日なり、沖繩にては刈上祭りの日なり。月見、正月十五日に対する満月などから、もとは八月十五日が祖霊祭りの日ではなかつたか、いまは盆と季節がずれても、なほこの日にその遺風が残つたのではないか、盗みの公認される日

でもある。

【鶏と死】水死人の死体捜索に鶏を用ゐる上磯の話をし、死と鶏との関係について述べしに、英国ゴムの話などには宮殿の柱を造立する際に鶏の血を滴らすと云、鶏を神使として神意を伺はんとした事があつたのではないか。なほこの問題は究明せば面白かるべしといふ。

【獅子舞と農耕】獅子頭と農耕との関連を考へるべきである。単なる芸能ではない。

四時研究所を辞す。

発 桜庭順三、杉野茂雄、渡邊邦輔、櫛引忠三、工藤美和子、坂本玲子
受 下山俊三、小包一、下山氏東奥年鑑寄贈のこと。原稿依頼のこと。
年鑑抜刷、のことなど。

六月二十三日(金)晴、暑し、三十二度と云。夜十一時夕立。

終日いづみ事務手伝、午後新宿に出づ。

受 三谷栄一、発 弘前中央校三年一組、○

六月二十四日(土)
いづみ発送手伝、正午研究所に赴く。

【漁と稲荷】「民俗学」一、二巻を閲す。折口先生「老岐島民間伝承探訪記」に同島にても漁と稲荷の信仰あることを知る。能登地方にも同例あり。

【杖】杖のこと、早川氏採集の三河の「にんぼう」の報告あり。大阪府枚岡神社の粥占行事に小豆粥と占竹のことあり、大師講の小豆粥と箸閑連あるべし。松村武雄氏「生杖と占杖」のこと同誌に連載せるを知る。

四時去る。鎌田事務員に柳田先生の伝言なりとて月曜金曜も出所すべき旨あり。留学について配慮を頂き感謝。明日研究会ありとの事。渋谷に出で帰る。夜いづみ事務手伝。

発 石崎官雄、幾代

受 高藤義雄 二十五年度文部省科学研究奨励交附金交附の旨県より通牒ありし由

六月二十五日(日)

十一時研究所に到に、午後二時より第五〇回研究会開かる。

【機織淵伝説】研究発表、機織淵の伝説 関敬吾氏発表

水の神に処女を犠牲にする伝説は、アルタイ民族にもあつて、水の主に犠牲にすることが見える。ドイツでもワツサガイサといふ名で行はれ、やはり人間を犠牲にするのであるが、日本の、その内容が複雑である。

水の神に処女を犠牲にするのは何故か。

日本の水の信仰が他民族とどう違ふかを前提とし

【水の神の性格】

1 水の神の性格が何であるかといふことがこの問題の終局の目的である。但日本は農耕国であり、稲作の国であるからだが、非稲作民族とどう違ふか

2 河童や蛇などが水の神そのものであるか、又は属性であるか。

3 龍宮の信仰と、陸上の水の神との関係

4 ハナタレ小僧など人間の形態をとつてくる水の信仰

5 水の神が何故祭の奉仕者として処女を必要としたか。

神の奉仕者に処女を必要とした事は勿論であるが、機織姫を何故必要としたのか。

6 水の神は人間にとつて一体敵対的な神か、好意を持つ神か、更に人間の如何なる態度に於て好意であり悪意であるか。

かうした事を先づ本問題についての疑問として提出しておく。

【伝説ノモチーフ】さて、この伝説は次の内容による系統に分れる。

一 水底に機織る音を聞く話としての系統

遠野物語、秋田、北佐久、南佐久、岐阜、愛知、静岡、高知の諸例。これは最初の発生の形態であつたか、又は信仰の失はれた残存形態か。

二 音のしてゐる水の中に入つていく話の系統

斧測、斧を落して入つてゆくと水底で女が機を織つてゐた

岩手のまないた測、下閉伊、福島石城のゴゼ測、茨城斧測

水の神は鉄分が嫌ひだといひ乍らこの話では斧を無事にとりかへしてくる。

三 入水シタ結果、水底デ機織ヲスル

宮城、若狭。千葉県長生郡と長野の例では嫁が姑にいちめられて

入水し水底で機を織る話になつてゐる。

四 機を織つた女が沼の傍で小便をした為_レに陥ちる。

五人柱となる系統。水害の為に困つて神意を伺ふと機のオサを持つた女を犠牲にせよといふ。

愛知、五月一日、滋賀の夜叉御前

かうした各種系統によつて次の仮説が考へられる。

① もと巫女の類で小屋で機織具(ヲサなど)を作つたものがあること。

② 座頭やゴゼなどが人柱に関係してゐる。

③ この伝説の伝播に巫女、座頭、ゴゼが介在したのではないか。尼ヶ測などの例があり、又三味線測といつて三味線をもつて測に飛込む伝説がある。

又音測といつて座頭が測に陥ちて池の中で琵琶を鳴らすといふ話もある。

【発生過程】この伝説の発生の過程として、

△機織女を人柱にした形式→△水の神に引込まれた、又は女自身より入水した→△斧淵系→△機の音をさく

【巫女の関与】ここで問題になるのは、水の中に女を入れた媒介者に巫女があること、堰神様に巫女の嫌はれた婿がなる話―遠野物語―などがある。

とにかくこの機織測の伝説も日本の水の信仰の一つの話ではないか、と思ふ。

○

質疑、

① 犠牲といふものは殺されなければならなかつたか。

② 海岸にこの伝説の分布がないか、(少いやうだ)

③ 水蜘蛛伝説との関係がないか。(水蜘蛛も水の神の具象だらう)

○

批評(○ハ柳田先生の発言)

【伝説分類の目的】○方法論の問題だが、何を知る為に分類するかをきめねばならない。

【機織は女房の仕事】○機織は女房の仕事ではないか。既に水の神に嫁してゐることだらう。

沖繩で聞いた話で、宮古島の例だが、官人の妾になる女が家の前で機を織つて人目につくやうにしてゐる。

○食物も衣服も夫のものは女房が作ることであつた。

伊勢の忌服殿(イモク)は、祭の前に神の衣裳を織る。これは水との関係はないか。

【水の神は男】○この話の場合は水の神は男性である。蛇婿入も同様に嫁ぐのは女である。海の龍宮は女であるが、これは日本の話の場合は主人である。

【柵の問題】○織姫を何故タナバタといふか。折口君が書いてゐるが、タナは水の上にかけて出した小屋のことで、柵はつまり足の触れぬ清浄なる区域の意であらう。

○一つ一つの伝説には新古さまざまの様式があるから之を分類せねば

ならぬ。

【機織と婚姻】○機織は婚姻と関係がある。機を人の目につく所、男の入りやすい所におく、即ち機織場は婚姻に都合のよい所である。

婚姻と機織とは水の神以前に関係があらう。

○この伝説の話はどこまで行つても想像に終るだらう。

○能登では機織りの話、女は実家に帰る、「ハタオリニカヘル」といふ。嘗て「をさを持つてる女」といふのを古い郷土研究に書いたがああ主旨は訂正。

△棟上(ノ)時に屋根の上に機織道具をあげる。それに飛驒の匠式の話がついてゐる。これは大工の妻を殺した話である（井之口）

【海から来た女房】○海から来た女、鶴女房、蛤女房など皆夫々□ませるのは料理や衣服を作る。

【機を織らぬ月】○五月は機を織らぬ月といふが、これは神の浄衣を織る月だからであらう。物忌みが農業者に多いのは五月である。

【機織測の原初形態】○機の音が水中で聞えるといふのは非常に印象的で単純で信仰的である。これがこの伝説の最初の形態ではないか。

○水の神にも順序があつて、機織測は物凄く静かな測があつて、そこから生れたものであらう。水害の生ずる場合ではない。農耕の水の神の他にもまだ水の神がある。

【山の龍宮信仰】○海に向ふの龍宮信仰が山にもある。水が地下を通じて信仰が共通してゐるといふ考があつたらしい。泉に関しては南方に少いやうだ。

【錦木塚】△錦木塚は正月十六日かに地下で音を立てるといふ毛馬内(瀬川)

○地名に注意した時に気がついたが、牛首、馬首といふ地名は大抵水辺である。然しそこで馬や牛の首を切つて投じたかどうかはわからぬ。

○水分(ミヅ)の神は全く灌溉の神である

【水の神の多元性】○水の神は多元的に考へねばならぬ。灌溉その他いろいろある

【太子と水】△九州では水の関はお太子様である（関）

○太子水といふ話もあるからその関連もあるだらう。

【白鬚水の話】○白鬚水（シラガミツ、シラシゲミツ）信濃が限界だらう。水害の時神が丸太に乗つてくる。大抵歴史と考へて何年何月の洪水の時といつてゐる。これは誰か究明しなければならぬ問題だ。

白鬚は元来湖水の神であるべきだ。却つて洪水の神になつてゐる

【水の神と材木】△水の神と木との関係がある。ハナタレ小僧、薪をもつてくる。（直江）

○日本の龍宮伝説で最も諛らぬのは花売りの話である。

燃料や花や、又は根無しかつらの根を売り歩いて売れず水の神へあげると礼を云はれる話である。紫波郡昔話にもある。

閉会五時。瀬川清子女史と少時交談。深浦、目の婆さんのことなど。女史は東北に若者宿がないといふのは嘘で下北半島東海岸部にはまだ顕著な例があることなど話す。

帰宅後いづみ發送手伝、十二時半就寝。

発 桜井冬樹 鱈ヶ沢七ヶ所をかける話の照会。

○本日本俗学紀要第一輯見本研究所に到来。

○本日の主なる出席者。関敬吾、宮本常一、石田英一郎、桜田勝徳、萩原龍夫、瀬川清子、大藤、和歌森、大間知、堀、直江、千葉、氏等約三〇名。

六月二十六日（月）晴、暑し。

朝「いづみ」發送事務手伝。正午研究所に行く。大間知、大藤、井之口、竹田の諸氏なり。

「東北文化研究」「旅と伝説」を読む。

水死の死体捜索に鶏を用ひしこと宮古にあり。函館に鯨供養のこと、香取神社にも船流しの行事ありしことなど知る。伝承習俗の唯一例といふことなきこと今更に知る。

鎌田事務員に和歌森氏に宛て「大山部落味噌搗写真」(二)―桜庭氏依託しとその旨の手紙を託す。留学のこと民俗研究所たよりに掲載する由にて同嬢より研究題目を聞かる。

此の頃湯茶喫し過ぎし為か腹具合少し悪しく不機嫌。

幾代より為替三千円到着。学校長より人文科学奨励交附金交附審査決定の教育長内報を移牒し来る。

発、桜庭武則(二)、北畠きさえ学校新聞 原稿のこと照会、幾代受、学校長、幾代、高藤寿子、木村勝代

六月二十七日(火)晴、暑し、

朝「いづみ」事務手伝、洗顔、部屋片附清掃、発送完了後専八氏宅にて鈴木氏夫妻と喫茶、高瀬先生夫妻葉山に動かる。夜十時まで高瀬邸にて兼連君の相手。蚊帳一張借留

発 今喜美、佐々木功、福土房雄、土岐春雄、壬生田昭四郎、神久造
六ヶ所村巡りのこと照会

六月二十八日(水)雨

午後昼食後四時半まで仮睡、夕方笹塚へ出、夕刊求む。内閣改造決定。北鮮問題につき米国武力発動のこと見ゆ。六月三十日の為(東京通信三)を認め、「出稼ぎの話」書き出す。夜に至り雨烈し。

発 神良治郎、弘三郎、山口壽

六月二十九日(木)雨

十一時研究所に着く。

【沿海地方採集手帖】『採集手帖(沿海地方用)』の内、「岩手県九戸郡宇部村小袖」(昭十三、九大島正隆採集)「岩手県下閉伊郡普代村」(昭十三、一〇桜田勝徳)「同県同郡重茂村」(同上)を見る。午後二時倫敦大学教授英人ダニエル氏、東大研究生社会学科ドーア氏(英人)研究所に來り柳田先生と鼎談、大間知、直江両氏傍聴。

【ダニエル氏】ダニエル氏は戦前大使館勤務。後小樽高商校、静岡高校英語教師たりし事あり。夫人は金沢生れで北海道に定住した婦人といふ。戦後倫敦大学教授で日本研究の指導者、空路屢々日本訪問をするといふ。現在同大学には日本語研究学生二十五、六名、教授六名と云、以下柳田先生の談話。

【フレイザーの影響】○私は英国フォクロア・ソサエターの会員だった。そしてその影響が多分にある。広い意味でフレイザーの弟子です。今でもこの研究所には英国のものが多い。この頃アメリカの同情で珍らしい本を送つて貰つてゐる。私も英語の本だけは読める。会話となると得意ではない。先づ六〇〜七〇%英国の影響がある。フォクロアの範囲は国によつて違うが日本のは広い。国語学、社会心理、テクノロジーなどもやつてゐる。それで私は何にでも手を出してゐるやうに思はれてゐる。

△(ダニエル氏)私自身の専攻は語学だが興味はやはりフォクロアです。○この研究所は出来て二年になりますが、いま各国の研究者のリストを作つてゐる。さし当りあなた方はそのリストに載る人だ。

□(ドーア氏)私は社会制度をやつてゐるから関係がある
【日本の社会制度】○日本の社会制度は非常に面白い。殊に親族の関係など面白い。

【神道の問題】神道が戦時中压迫され政治に利用されすぎた。正しい神道の意味を伝えるつもりで今主として神道をやつてゐる。

【スコッチ氏】ロバートソン・スコッチ氏が日本に夫妻で來た時に、私

がつれて歩いた。彼の著書に私の写真も出てゐる。あの本はこゝにあつたのがなくなつて戦後手紙を交換した時にその事を云つてやつたら向ふで探してくれる筈になつてゐる。

私もこちらから行つた時にオクス・フォードの近い所に彼が住んでゐてそこに泊めて貰ひ方々案内して貰つた。もう一度行きたいが、もう腰が痛くて行けない。

○この「西は何所」といふ本は日本の虫のことばかり書いたものです。

【青大将】青大将は挙動は別で悪い事をしない。主なる食物は鼠と蛙です。

□逗子に住んでゐた時隣りの大工が青大将を祀つてゐた。

【尻切蛇】○尻切蛇といつて尻尾の切れてゐるのを祀つて崇めてゐる例がある。大きい奴も決して悪い事をしないので大事にします。

【サムソン氏】サムソン氏はどうしてゐます

□近く東大へ来て講義さします。まだ七〇才にならんでせう。

【羊羹】○あなたは小豆で作つた日本の菓子は食べられますか。西洋人が日本の生活に馴れたかどうかのあれは一つの関門ですよ。あれは西洋で食つてみると実においしくない。やはり茶と一緒になければ。私はよく欧州にゐた頃わざ／＼日本から送らせたがおいしくなかつた。

【遠野物語】遠野物語を英訳で出したいといふことで戦争直前に英国から照会があり土居光知氏にもたせてやつたら、出版したいといふのでその後承諾のサインをしてやつたが、その後どうなつたか。

【昔話】○日本の昔話（フォークテールズ）はなくなつたばかりでなく、笑ふ話ばかり多くなつた。馬鹿狸馬鹿嫁などのやうな。今は他に面白いものが沢山あるので、子供も昔話を喜ばなくなつた。そして昔話はすぐ人が死んだりして残酷だから。

【太陽を拜む】琉球の話は決して支那のものではない。政治的に支那と同居しなければならぬ事はあつて、例へば天を拜む習俗など日本にも支那にもある。太陽を拜むのも空の天頂にあるのを拜むのではなく、海か

ら昇る所を拜むので、神様のゐる位置が違ふ。

【日本民族】日本語や日本人の系統は私の想像を以てすれば、その親族は皆死んだと思つてゐる。日本へ渡るときひどく災害があつて殆ど同族は死滅したから、尤も一部は隣邦に普遍してゐるか、日本のエスノロジー学会で江波といふ人が支那の北方の騎馬族が日本へ渡つたといつたが、米を作ることを考へぬ。我々の考へてゐるのは、もとの米を作る民族のことだ。これからも永い間には何処かの民族と言語が似てゐることが決るだらう。想像では日本人のイトコは何処にもないと思つてゐる。

バスク族と似てゐるといふ説もあるが、バスク族のカトリック神父カンド氏がよくこゝへ来たが、全く違ふと言つてゐる。

□朝鮮蒙古語の文法や文章の構造が日本語と似てゐませんか。

【語序の変化】○日本の語序は中世に変化しなかつた、とはいひ得ない、形容詞は文の終りについてゐたが今では語の上につくことになつてゐる。「きよら君」といふべき所を「君きよら」といふ風に使つてゐる。日本ではいまますべて文章の終りが「る」で終る語ばかりで、文章や演説では全く困つてゐる。オビジェクトが終りにくる英語が羨ましい。日本語では韻が踏めぬ。歌や俳句で名詞止めにするのは動詞があとへくるのが厭だからだ。「秋の夜の月」といふ風に。全く韻が踏みたいからである。今の日本語の状態を少しづつ変へぬと文章が書けぬ。近來幸に国語問題に注意するやうになつたが、然しまだ前途道遠といふ感じである。

△唯今のお仕事は。

【離島調査】○私はもう年をとつて何も出来ないが、研究所では日本の小さい島を調査してゐる。占領されてゐるには別として、これから三年間に少くとも三〇位はやるつもりである。これまでも調査した所があるので、それ以外の所を大よそ一ヶ月位の予定にしてゐる。

△採集する相手はどうして選びますか。

○一度では駄目です。最初と二度目では相当違ひます。日本人といふの

は初めて逢つても酒を一緒に呑めば翌日はもう懇意になる。酒を呑むのは面倒だが、さうでなくとも二度目に行くと大てい話してくれる。研究所の人達にも三度位行かねばならぬといつてゐる。こちらの質問に対して日本人は何故そんな事を聞かぬかといぶかることは少い。尤もこの調査は私の動機でなく、学問の為だ。世の中は変わりつゝあるので。今のうちにあなた方の話しをきいて置かねばならぬ」といへば皆納得してくれる。

【伝承者】我々は伝承者型と呼んでゐる老人は、伝へねばならぬ義務を感じてゐるのだ。零落した家の媪とか本家の老人などは殊にさういふ自覚がある。死ぬ二、三年前になるとしゃべりたがります。

○この方は森山君といつて、日本の北の端の津軽の人です。学校の先生ですが、先年から津軽の海岸をすつかり歩いて、こんどその材料を持つてこゝへ留学に来た人です。津軽のことは何でも訪ねて下さい。

□小樽高商にゐた時分津軽の海岸の村から来た学生が一人居て、さつぱり言葉が訣らなかつた。英語で話した方が早かつた。

【日本語の造語能力】○日本語に造語能力がないといふことを言語学者で言つてゐる人があるがとんでもない間違で、日本語ほど造語力のあるものはない。：的だのといつて的の字一つさへ知つてゐれば何でも上につける。尤も若い人々はいゝが老婆さんや子供は使へない。：めくだのといつて台（ベース）さへ知つてゐれば何でも自由につけられる。ガナルだのゾ？ナルだのいふ風に語調を強めるいひ方が随分變つて来た。

東京の言葉は名詞が多いが動詞・形容詞が少いから自然言ひかへて語調を緩めやうとする。

それから何でも名詞を活用させて野次るだの料理るなどいふ。この頃電車の中で学生の言葉をきいてゐると：ヨといふのを使つてゐるが、あれは伊豆の南にあるいひ方で野車だといはれた使ひ方だつた。

支那民俗誌（三冊）の著者長尾隆三氏来所にて右の座談に同席。千葉徳爾氏より竹田氏の伝言として民傳へ論文二〇枚を七月十日迄に書くべしといはる。

本日直江、大間知、千葉三氏と小生のみ。堀氏午前中に戸田氏と要談。離島調査要項再校来る。浅田悦太郎氏「三宅島方言集」（全国方言集の内）原稿複写来る。研究所にて民俗学紀要第一冊購む（二五〇円）。

発 東京通信三
受 幾代、成田むつ

六月三十日（金）晴

午前一〇時研究所へ赴かんとするに三谷栄一氏より電話あり。即ち神田有精堂ニ至り同氏と邂逅す。昼食（日本酒一本、寿司）後神田古書街を歩き神保町より都電にて日本橋に出で、室町山崎屋にて鯉節、山本屋にて海苔共に三谷氏より饗く。三越本店に少憩後バスで東京駅、更に新宿に到り泰華楼にて夕食（ビール一本、シューマイ、五目麦蕎^{ゴシヤク}、三谷氏五時五十五分発にて甲府に帰るを見送る。夜笹塚映画館にて「細雪」を観る。

三谷氏との対談要点

【海の神と祖神】①海の中にはワタツミの神と、常世より寄り来る神あるべし。山の神にも自然神と祖神との二様あるか如し。

【水の神と早乙女】②機織測の伝説の前提にサオトメと田の神との関連あるべし。早乙女虐待の話の方古かるべし。之を犠牲とせしとき囃せし為か、音曲のみ残りて田の神を祭る田唄となつたのであらう。

③六所祭りの信仰至つて面白し。三十三観音巡りの信仰も恐らく仏教以前の古神道の信仰より発せしものなるべし。

神田日本書房にて「食制採集手帖」求む。百円。

発 相馬キミエ、工藤ヤエ、安藤夕エ、工藤達郎、中谷六郎、成田むつ
受 木村勝代

七月一日(土) 晴

十一時研究所へ。九州某新聞者記者の原稿依頼(祭について)に対する
柳田先生の言葉

【お祭騒ぎ】○私は今の祭の仕方には反感を持つてゐる。大騒ぎしてば
かりゐて神道の本質が失はれてしまつたのが残念だ。神道を維持する為
に止めさせなければならぬ。元来、都会のものゝやることで、それを
羨んでしたことにはすぎない、それでは金持がない所だとか、五十戸位の
小さい村では信仰は何も出来なくなつて了ふではないか。九州の文化の
将来についてとでもいふ事なら将来考へてみてほしい。此の頃体の具合
が悪くて期限付の原稿はお断りすることになっている。

『採集手帖』のうち「千葉県安房郡長尾村」(瀨川清子 昭十二、十二)「同
県同郡富崎村」(同上)「千葉県安房郡千倉村」(同上)「福島県石城郡豊
岡村」(山口弥一郎 昭和十四、八)「宮城県本吉郡大島村」(附岩手県気仙
郡綾里、越喜来、吉浜)(守随一 昭十二、四)以上をみる。

【茶の話】昼食時の座談茶の話。千葉、井ノ口、福島、高橋、鎌田、森山。
茶屋と茶舗、茶を吞まぬ村、俗信。茶柱が立てば左の手でとり左の袂に
入れ、ばい、と云、(鎌田)

午後二時半元広島文理大教授西洋史専攻新見吉次氏来訪。先生と高等学
校時代の同窓の由。先生と懐旧談頻り。先生の母堂を知つてゐると云。

【足軽】△いま分限帳で足軽のことを調べてゐる。文化頃からでない
記録で足軽の内職のことは訣らない。

【隠居】○隠居といふのは本家と同村にあるのが元の形であつた。初め
から家を別部落に立てるとは違ふ。或山村で家を建てることを許さず、

タナといつて道側に作りそれに母屋から廊下を通したのもあつた。
福島惣一郎氏より刺をうく。本日他に直江、大間知氏。

発 幾代 小包一。

受 石塚尊俊。
帰途成城より大間知氏と同車、経堂まで。八丈島の話を纏めたしといは
る。

七月二日(日) 晴、暑し

朝洗濯四点、代々幡局に小包差出し帰途甲州街道路側に印刷所万葉社あ
り、志賀氏を訪ねたるに不在。午後散髪、夕刻鈴木好氏に招かれ夕食を
饗せらる。「漁の神」構想に努む。

発 森山光子、鈴木太左エ門、葛西□藏、□喜美栄、高□義雄、今泉
美智子(小包)、三谷栄一(小包)、三年一組(通信二)

七月三日(月) 晴暑し、午後より曇、冷

十一時研究所着。「新潟県佐渡郡内海府村」(倉田一郎 昭十二、一〇)「石
川県鳳至郡七浦村」(大藤時彦 昭十二、五)「福井県坂井、丹生郡諸村」
(瀨川清子 昭十五、三)以上採集手帖を見る。午後二時半曇り雨到らん
とする気配に福島惣一郎氏と帰る。

和歌森、竹田両氏より津軽の海村の採訪記にてよろしく月末まで原稿を
寄せよと云はれ即ち約す。

【枕の話】帰途中福島氏枕と民俗を語る。北枕の外、東西南北の方角
と枕と関係あり。死者の寝かす方角と一致するもせざるもありと。マク
ラは結局巻くことなるべく、草や萱などを枕にし、而も高きものなるべ
しといはる。即ち東北方言巻くを巻くといふ。マクラはその変化なら

ずやと述べたり。渋谷宮益坂を漫步し帰る。夜下北沢を漫步。
受 幾代、葛西ヤス、壬生田昭□郎

七月四日(火)曇

朝洗濯三点。夕刻三時間眠る。夜入浴後「出稼の話」書き続く。
けふは終日鬱陶し。

発 幾代速達、井浦芳信、小山内時雄
受 沼倉孝子

七月五日(水)曇、暑

午前二時まで「イソモノの話」書き、三時眠る。八時起床し、昼まで「イソモノの話」書き継ぐ。正午睡眠。午後三時西荻窪能田多代子女史を訪ねしに留守。赤坂表町長谷川氏を訪ね、未亡人より下宿屋経営の困難をきく。

西荻駅前書店に「京都古習志」あり。夜「網の話」書き上ぐ。

発 菊地久雄、葛西ヤス、沼倉孝子、奈良広太郎

七月六日(木)晴、暑

十一時研究所に着。先生より津軽の海村を留学中に纏めるやう再び促さる。沿海採集手帖「静岡県賀茂郡南崎村」瀬川清子 昭十三、三、「愛知県幡豆郡佐久島村」瀬川清子 昭十三、八、「愛知県知多郡日間賀島村」瀬川清子 昭十三、七、「新潟県西蒲原郡間瀬村」橋浦泰雄 昭十四、七
「京都府北部諸村」瀬川清子 昭十四、十二 「三重県北牟婁郡須賀利村」牧田茂 昭十二、八、を見る。

本日直江氏のみ。
発 三谷栄一、幾代

受 三谷栄一、十六日山梨郷土研究会開催につき来会すべしといふ。土

岐春雄

七月七日(金)晴 猛暑

十一時研究所に到る。既に小井田幸哉氏来り三戸郡の地名に関し大間知氏と対話中。久闊を叙し鼎座暫く語る。注射にお出かけの先生正午お帰りになられ小井田氏の質疑に答へらる。

【法量様】○法量様には大てい藤の木がある。それで蛇の信仰だらうといはれてゐる。

△南部に田の水口の引け口に法量様を祀る所があるといふ小井川氏の話である。

【石名坂といふ地名】石名坂といふ地名は古く吾妻鏡にも見える。珍しい石のある所には必ず伝説があるが、これもその一例であらう。全国に不思議なほどこの地名があるが、結局石坂といふことだらう。

【律語の必要】固有名詞は歌にするに五音節が都合がよかつた。歌謡か語り物にする為に律語にしたのだらう。

【アラヤ】○アラヤは新宅である。荒屋と書いてゐても同じ。コウヤと読む場合は別だ。分家をアラヤといふ例がある。

【コウゲ】○コウゲもカッと同じ。カンガも同様である。関西にはコカゲが多い。水の乏しい所、水田耕作はむつかしいが、畑作には適するといふ所だ。

【「ヤン」といふ呼び方】○森山君は昨日の爺さんの話をきいてゐて面白かつたらう。誰ヤンといふ人の名の呼び方をするね。あれは私の国の本當の常民だね。

【マギ】○古間木のマギは語尾ではないか。マギは古い日本語で、京都でも云つてゐた。家の高い所に物をしまつておく所、牧と書いてあれば牧場に充てたのだらう。

【夏のつく地名】○夏——といふ地名などは、何か夏の季節に関係した

のだらう。さう穿鑿するまでもないと思ふ。

【地理学の問題】 ○忠告しておくが、地名研究は地理の問題で、私のいふ民俗学ではない。民俗学の方法を以てするといふことだけだ。この点をはき違へてはならない。

【発表は要約して】 ○知つてゐる事はいくらあつても、発表する時はいつでも要約して短かいものでなければいけない。いくら話したくても相手が聞いてくれなければ困る。一つの問題にお別れする時は短くして発表することに心掛けねばならぬ。そしていつでも世の中を益するといふことを念頭におくのが学者の務めだね。

小井田氏痔疾の注射の為上京の由にて、一時半帰る。

橋浦泰雄、萩原龍夫、今野田輔氏と語る。萩原氏菅江真澄の年中行事採集につき検討の要あるべきこと語る。亀山氏と津軽の漁村につき語る。採集ノート借覧を申込み、来週を約す。同氏八月千葉氏と陸中江ノ島採集後下北津軽半島を採訪したと云。

昼食後、カルピス、サイダー来る。大藤氏より杉浦氏よりの依頼のこと頼まる。日曜杉浦氏と逢ふ約をする。

午後二時半先生を中心に成城学園の社会科学研究会あり。出席者同校教員七名。

△海のことを子供に理解させるには。

○流れの末といふ心持で話せばよい。水源の方は仲々考へにくいだが、流れの行末といふことは比較的考へ易い。

【原因と結果】これが同時に原因と結果を考へる練習になる。単に地理だけの問題ではない。二年生でやつておくと、三年の時の遠足が楽しくなる。

【子供の想像力】海は広い所だ、と教へるといろ／＼子供の空想が発達するので、今度ゆく時きつと面白いといふ考を持たせる。

○我々も子供の時分は硯の海といふことをいつた。小さい溜水でもすぐ海を考へる。

【石器人の扱ひ方】 ○石器人のことは「大昔の人々」といふことでは入れたくない。先祖か、他国人か訣らないのだから、まだ未決の問題だからね。坪井正五郎氏は動坂の不動堂に、当時の知識で先住民の生活を画いてその絵をあげたことがあつた。考古学をやる人はあとでつまらないことだと気がつくが、学問をやらぬ人は、その絵をすつと思ひ込んでしまふ。世を迷すことだ。

子供は空想力が発達してゐるから、教師が大体話してもその輪郭を作るものだ。誤つた絵を画いて示されたのではやり切れない。

【地理の必要度】 ○地理は歴史より来るのが（必要の）早い。一年生で東西南北と、右左は教へなければならぬ。二年で距離を教へる。これも悪い癖で星の距離などと遠いことばかり教へたが、もつと近い距離のものを教へる必要がある。

【郵便の今と昔】 ○「郵便」のことは「今と昔」といふ單元に入れるべきだ。

この制度のない前は飛脚であつた。これは非常に数が少くて、静岡—東京□□のやうな大きな道路だけである。小さい村では別飛脚とか早飛脚とかいふものを仕立てるか、これには弁当や松明など持たせねばならず大へんだつた。

【コトツケ】その他はコトツケである。これはよく発達した。

【間接描写】「…に逢つたら、…にかうした事を伝えてくれといつてくれ」といふやうな間接描写がよく行はれた。

【表現の進歩】これが言葉の上に表現の進んだ原因だつた。だから郵便のなかつた時はかうしてゐたんだといふ歴史の「今と昔」で考へるべきだ。世を益する制度の恩恵といふことを感じさせることが大事である。学校ですぐ郵便局へつれて行つて切手を貼らせるやうな事ばかりしてゐるが、これは末の話なんだ。

【郷土の扱ひ方】○「郷土」といふことの教へ方は問題だ。礼賛もいけぬし、抽象的でも困る。

【オシラ講写真】東奥日報社下山俊三氏より先般依頼の同社撮影、久渡寺オシラ講写真（六月上旬夕刊写真掲載及未掲載ノモノ）九枚送らる。研究所にて柳田先生始め同人に示す。信仰よりも寧ろ芸能化したる容相に、オシラサマもかうなつたかね、と先生感嘆久□うせらる。オシラの本を出す時は一枚写真に入れやう、この写真は研究所に暫くおいて皆に見せてやつてくれと仰せらる。

高□兼介氏夫妻箱根行き、留守を托さる。この夜高□氏方に兼連君を相手に泊る。

受 工藤達郎、山口寿、下山俊三、今泉美智子、葛西要蔵
発 通信四

新暦七夕の日にて色紙、切紙を吊したる竹枝門に立てたる所間々見ゆ。
本日午後五時気温三三、五度にて本年度最高温といふ。

七月八日（土）晴、甚暑

午前十一時西銀座五ノ五西銀座ビル三階東奥日報社東京支社に尾崎支社長を訪ふ。下山俊三氏の紹介名刺持参。年鑑の「年中行事」抜刷貰ひ度しと申入れしに印刷所へ交渉の上、月曜日再訪されたしといふ。即ち約す。応接態度支社長の人柄にあらず、銀座少時漫歩、一時帰宅後直ちに洗濯六点。

暑熱昨日に此も劣らず。夕食後入浴、「風の話」書きつぐ。

発 高藤寿子、成田一雄、幾代書留

受 高藤寿子、文部省人文科学研究費奨励交附金五千円小切手同封書留、木村勝代、成田一雄

七月九日（日）晴、甚暑、強風

十時半研究所へ。千葉氏より山の信仰いろく聞かる。山に入った人の話、山の神と農、マタギ部落、イタコ以外の神憑女、田代岳の信仰のことなど。山岳信仰の原初形態を止めてゐるのは東北と南九州ならんも資料至つて少しといふこと。

【山と農】山の融雪の貌を以て農を占ふことが山の神の田の神としての信仰をもちし根因かといはる。

十一時半能田多代子女史来所。久闊を叙し、同女史宅に寄宿を奨めらる。好意深甚、再考を約す。女史昼食後、先生と話し程なく帰らる。

十二時半、杉浦健一氏及び祖父江孝男氏に逢ふ。予て大藤氏より依頼ありしことなり。両氏本月下旬より八月に互り車力村を調査したきにより便宜を求めらる。泥炭の採掘を中心に部落民の異動の問題を調べたしと云、齋藤馨氏を通じ松木氏に連絡の予定、旁々竹内こう氏姪□井氏に案内を依頼しある由、即ち同地方の梗概を話し、中村、三橋両氏の名など挙げおく。

一時半談話会開催

発表、小林氏「魂迎へと魂招ぎ」精霊迎への種々な方式と習俗。

（以下○は先生の批評）

【奄美大島の魂祭】○奄美大島では盆を迎へる先祖祭りの日は二つある。（一）七月で仏壇でやる精霊祭り、火は焚かぬ。鹿児島から学んだものであらう。

【コウソマツリ】（二）島在来の習俗に八月、コウソマツリと云、考祖、高祖の意でなく、コウス祭りだらうといはれる。火を焚く。

（一）は単にテモチといふ精霊に対する土産を供へるだけである。先祖に対しては食べるもの、うどんなどをもたせてやる。つまり食物を副へて先祖を送るのである。

【コスガナシ】(2)はコスガナシといって海から渡つてくると考へられてゐる。身体が寒いだらうといつて迎へ火を焚く。門口に麦藁を焚く。コスムカヘといつて、コスガナシ(カナシは尊敬の意)を迎へるといふ意である。

【海から精霊が来る】○盆の仏は山から下り、墓へ行き、迎へられて家へ来ると思つてゐたが、海から来る盆サマがあるから、山の上に霊があると考へたのは後の事になるかもしれぬ。その前に海の外に居て、それが盆の日に帰つてくるといふ考があつたのかも知れない。

龍宮が山の奥にもある。水の元祖を山奥にみてゐた。雨が山へ降り、海へ注ぎ循環する。

【山と海の一致】従つて山頂も海の地平線も一つであると考へたのであらう。

【習俗の型】○盆の行事は殊に頻繁な行事が多いから、型を作つて実例を分類して発表する必要がある。

○鬼界島にもコウといふことがあるが、やはり先祖を祭る事であつた。

○川原で火を焚く例もある。これは川から来るといふ考だ。

【海岸の墓】○香川県小豆島では海岸に墓がある。棧橋の側だつたりする。各地に例が多い。

最上、浜から十三年目に掘出して、一日家に置いて墓へ収める。コツアゲといふ。

発表、川端氏「廁神」

信州タカミサマ、石垣島カムタカといふこのタカの関連、大便、爪、髪など人体の一部や分泌物に威力があるといふ觀念について。

直江、廁の神と竈の神は夫婦といふ大藤氏の沓岐の採集があつた。

【廁神と家の神】○廁の神は家の神だといふ考があつたらう。

【タカガミといふこと】○タカは荒い、強い神の意で、クニツカミがア

マツカミを見る時の心持がタカカミでなかつたか。

カムタカは形容詞が語尾に来た例とも考へられるが、威力のある神として副詞的な用語であらう。キミキヨラの例と同一ではない。

【米と下肥】○米に下肥を使ふことは新しい。野菜には延喜式あたりから下肥を使つてゐることが見えるが、米と人糞の關係は少い。

堀。宇治の肥舟など高瀬川を下つてゐるが、宇治では京都の肥料が必要だつたらう。

○廁神と箒のことはあるが箒は憑りましになる。

【カンジヨウ】○カンジヨウといふ語は東北ばかりでなく、九州でも上流士族で使つた。

発表、北見氏「イチガミ」

イチガミは山形、秋田鷹の巣あたりにも多い。イチ(市)との關係

【大鳥】最上、八王子は大鳥がイチガミである。

【イチとイチメ】○イチとイチメと關係あることは折口君が早くから言つてゐる。イチコは齋くことだからよくわかるが、マーケットのイチの方は誤らぬ。「安居神道集」にヒルコ(エビス神)がイチ神になつてゐる、イチメのイチは巖島のイツなどと同じことだ。

【神体は石】直江、石の神体のほかに樹木の例がないか。

○イチガミの石のほかに木を立てたものもある。

【区画の神】○商業の神よりも先に区画管理の神らしい。オホイチの神が神代巻にあるが何故あゝいふ名をつけたかわからぬ。

直江、ツバキイチは椿を持つて占をすることだと折口先生は説いてゐる。

○イチの発生は古い。書紀にもある。ツバキイチは景行紀に見える。顔の知らぬものが出合つて交換することから信仰が伴はねばならぬと考へたのだらう。

取引交換といふことに関与することは何もない。

最上、祭の共食でとりかへて食ふ事とイチの交換と関係がないか。

○共食はその場で食つて了ふのが主である。交換しても持つて帰る場合は少い。

関、イチの語は場所か、商業行為か。

【イチは場所】○日本では場所だ。「イチに買ふ」とか「イチに立つ」といはねば行為にならぬ。

○相互贈与が交換になつた。宗教上の結束から何か与へねばならぬといふ感じがあつたらう。交換の語はアタへ、アタハス。

【物の交換と語】杉浦、ヤップ島では物を交換することも物によつて語が違ふ。

【タベト】○日本海沿岸にタベトといふ語あり。売買する行商人のことだ。一貫タベトといふのは一貫だけしか資本のないタベトをいふ。トビは人に物を貰つた時に感謝する語でトビもタビといふ語だらう。

【旅の語源】知らぬ土地を旅する時屢々タベといふ語を使つたのがタビの語源であらう。

【ミソハギは箸の木】○ミソハギはメドのことで箸をとる木である。何故盆に用ゐるか、問題である。

【正月と墓】最上、正月元日に先づ墓へ詣でて後神棚を拝む習が千葉にある。佐賀にも同例がある。

直江、埼玉にトシナを大晦日墓に上げる所がある。

【成長と老衰】杉浦、人の成長と老衰の問題を考へてゐる。

【死なぬ時期】○祭りや正月には人はあまり死な、い。気の張りである。

【女と祭】女が祭りから遠のいたのはケガレから来てゐる。生理現象からがつかりして信仰が遠のいて了ふ。政治上の理由からばかりではない。

【死の予言】○日本人は何時死ぬといふ予言をする事は多い。死期を知る事は一つの文化人類学だらう。公人の出家は死が近い頃にしてゐる。

死期を知ると気が弱くなる時期にひよいと入道する、

【死期を覚る】これと死期を覚ること、関係があらう。

○猫も鳥も死骸を見せぬ。橋の下あたりで二三日静かにしてそのまゝ死ぬ。動物には皆あつた死期を知る力が人間に失はれたのだらう。但し人間には意志の力で死や生理をコントロールする力がある。

【厄年】四十二を厄年といふが、死ぬには早いが動揺する。

終了後関敬吾氏に庚申信仰の昔話を訊ねしに他に例なし。発表すべしといはる。夕食後下北沢小林氏方に井之口章次氏を訪ね、十時半帰る。同

氏より折口先生近影一葉(昭二四、三、二〇写)贈らる。

けふ午後一時和歌森、竹田氏ら対馬へ出発。牧田氏十一日といふ。

発 下山俊三、工藤浅吉、□忠七

受 赤平喜美栄、渡辺邦輔

七月十日(月)曇、時々雨、夜涼し。

午後一時西銀座東奥日報社支局を訪ね東奥年鑑「青森県の年中行事」抜刷(校正刷)一部貰ふ。風邪の気味にて軽き頭痛。夜「風、流星」のこ

と纏む。

七月十一日(火)晴、暑、夜、雨

午前手紙書く。午後「沖着物」を纏む。夜沼袋へ。十時半帰り入浴。

発 桜庭武則(三)、松木明、中村勇造、三橋□□、伊藤政次、永野利春、

柳谷礼三、小山敏夫、市田正治、岩□卯一郎、小井川潤次郎、尾崎竹四郎、須藤均次、阿保恂二、猪股まつ

受 菊地久雄

七月十二日(水)晴暑、午後より雨

十一時研究所へ。大藤、大間知、井之口三氏のみ。「香川県仲多度郡高見島村」武田明 昭十四、六「愛媛県伊予郡松前町」瀬川清子 昭十四、八「徳島県海部郡阿智村」同上「島根県簸川郡北浜村」同上「大分県海部郡海辺村」同上 昭十三、十二「大分県北海郡一尺屋村佐賀関村」同上 昭和十四、一 高橋嬢より「本流」求む。
後二時半頃より雷鳴驟雨あり、夕刻一時晴、夜又降。

発 中央高校定時制

受 三谷栄一 山梨郷土研究会二十三日に延期の旨 葛西やす

七月十三日(木) 晴、午後曇

昼近く曇り。「烏賊漁の話」「鯡と鱈」「釣漁」「村の話」「鮑」を書く。

午後驟雨あり。夜涼し。

受、田口庸一、幾代速達書留

七月十四日(金) 晴、涼

十時渋谷上通り大阪銀行渋谷支店にて青森銀行津軽支店小切手五千円受領。東横百貨店にてシャツ等購ひ研究所に到る。井之口氏整理の「民間伝承」第一巻より取りそろへるの分一組七四〇円にて求む。「沖繩宮古郡平良町池間」森田勇勝 昭十三、十二にて「沿海地方採集手帖」三〇冊全部閲読了。「郷土生活研究採集手帖」の内西郡明石村(後藤興善氏採集 昭一〇、六、二二、七、二。昭一一、九、六、九、一七)を摘録す。
午後二時折口先生来所。少時語る。竹内運平氏、早野三郎氏のこと、斎吉旅館のこと、齋藤吉彦氏の学生時代の論文この頃慶應にあるを見る。遺族に贈らんかと。鯉ヶ沢に行つた頃はまだ鉄道は鯉ヶ沢までなりしこと、轟木あたりまで歩いたことなど語らる。

柳田先生国語研究所より午後三時帰らる。國學院の大学院設置につき教授に就任方昨日石川学長、岸本教授より交渉あり。内諾を与へた旨につき折口先生と語らる。

折口先生明日より箱根へ赴かる、由。
けふ大塔、大間知、千葉、井之口氏。

発 幾代

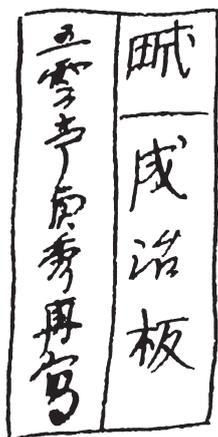
夜、入浴後、幡ヶ谷本町万葉社印刷所に志賀定太郎氏を訪ねさまく語る。

七月十五日(土) 晴、暑

十一時研究所へ。「郷土生活採集手帖」(赤石村) 書写了。

千葉、井之口、福島三氏のみ。夕食後仙秀邸へ参上。

【岩木山の版画】(1) 貞秀画「岩木山眞景之図」三枚続を先日友人某持参す。見るに図中平尾魯仙写とあり。即ち魯仙の下絵を貞秀の模せしものなるべく、八月朔日百沢村の光景なり。中央に岩木山、左に神社境内を見せ、境内の蕎麦屋(新町某とあるなど)、殊に床屋あり、結髪のままなど面白し。下山の踊りにチヨロケンと大阪にていふもの冠るものあり(魯仙年中行事風俗中盆踊の場面にもあり)、



上の如く見ゆ「下町・成活板」
と思はる。

この画嘗て「錦絵」誌上に紹介せられしことありと云。

【施餓鬼のサバ】(2) 散飯^{サバ} 弘前にて仙秀氏の祖父など朝飯のとき膳の隅に箸にて飯粒少々取り置く。サバといふ。施餓鬼のものなりと。一葉「たけくらべ」吉原風俗につき考証をうかがふ。帰宅十一時。

受 中央高校 文部省科学研究奨励交附金に関する電報移送、赤坂文弥、阿保恂二、安藤タエ

七月十六日(日) 晴、暑、夕刻より曇、夜涼し。

午前より午後にかけて洗濯九点。

【海と労働】「漁獲物の加工と販売」書く。夕刻より甲州街道笹塚、代田橋附近散策。京王電車沿線に楡の喬木などあり、武蔵野の面影残りしと覚ゆ。盆提灯を下げ浴衣の子供ら嬉戯れす。

発 神良治郎、木村源蔵、佐々木繁、赤坂文弥
受 市田正治、桜井冬樹

七月十七日(月) 晴、暑、強風

午前より夜にかけて「ペンザイ船」「船に関する資料」書く。

夕刻渋谷を漫歩、帰宅後入浴。

受 中谷七郎、水沢愛子
発 桜井冬樹石川の移民のこと照会 水沢愛子

七月十八日(火) 晴、風強し

【若者組の話】「年中行事」を書く。夕刻渋谷に到る。九時能田女史を訪問。

【アマガユ、アマユ】アマサケのこと話あり。津軽、南部はアマガユ、アマユなり。南部は春田植にアマガユを出す。汁は緩しと。

【陰膳】旅立ちの人ありしとき陰膳をすゑる習につき、三年経ちて音信なきときは仏になりたりとて止むと云。

【十三の舟玉様】女史柳田先生と十三に到りし折、小倉常蔵氏の神棚の奥に丸く長き袋に入れたるものあり。先生はあれが舟霊様だと云はれしと。

【ゴマの木】クロモジの木を南部でゴマの木といふ。護摩に焚くからだといふ。

十時半辞す。

発 西山豊 小泊のこと照会 工藤規 十三の舟玉祭りのことなど照会

七月十九日(水) 晴、暑

十時半研究所着。研究所にて「年中行事」「海村の今と昔」書く。

柳田先生より仕事は緒についたかとお尋ねあり、なほ三十一日津軽の海村巡遊の話せよと仰せらる。大間知、直井、大藤氏等同じく奨めらる。三時コーヒーシロップ煎餅など出さる。けふは右三氏と井之口、亀山氏なり

夜鈴木好氏を訪ぬ。

本日気温三三、八度、本年度最高なりと云。

七月二十日(木) 晴、暑。

十時半研究所へ。堀一郎氏とオシラの写真を中心に語る。ゴマの木は香を主とするが、クロモジは東北で最も匂ひよき木なること柳田先生の説かれし所により考へ合せらるべし。

【巫女の修業】イタコ修業のこと庄内地方にては難行苦行の末一時気絶させて生れ変らせるといふことあるも津軽にては如何、調べらるべし、などのことあり。

大間知氏、近刊の辞典にオシラの写真の内一、二葉挿入したし。明日大

藤氏等と相談すべしといふ。

【琉球舞楽の図】「琉球舞楽の図」一巻、比嘉春潮氏蔵、大間知、堀氏等とみる。天保十一年十二月二十二日の舞楽なりと東恩納氏の考証あること箱蓋に見。

午後農林省総合研究所勤務の女性二人来所、先生の話の概要左に。

女性の生活のことで殊に労働着を如何にしてやるかを考へねばならぬ。

足は昔は裸足でそれから足を怪我せぬ程度のアシナカを穿いた。農村の女はハイヒールや洋服では働けない。

第一に髪が困る、昔から日本の女性は髪に随分苦労してゐる。女の生活には精神状態も考へてやらねばならない。有形的なものも総合的に考へねばならない。一番気をつくのは村の女が遠くまで行つて電気をかけてもらふ程度でどうするだらふといふ事である。稲、麦の調整の時はひどい埃で、あんな髪では仕方がない。昔も女は髪を埃に引かれて多くは手拭を冠つた。手拭を冠る為には頭の髪がでこぼこでないやうに引きつめたのである。

手拭はもつと高尚な目的で作られたが、現実には手を洗ふ時に手拭は使はぬ女でも頭には冠つた。麦の穂を叩くカラサホは埃の製造所である。今の髪ではどうしてゐるか不思議でたまらない。どうして埃を防いでゐるか考へてみたいものだ。埃だらけでは油でもつけてゐないことにはどんな櫛でも埃はとれない。手拭で頭を包む時にはきつとまとまつた髪形にするだらうと思ふ。江戸時代の初から女の生活は都会や貴族の生活を真似て来た。元来頭と足は真似やすい。殊に頭の問題はうるさい。いろ／＼面白い髪型が流行し、嘗てカメメツトといふやうなものまであつた。それで手拭が冠れず従つて労働も出来ないといふことになる。昔の労働衣には二色あつた。モンベとハカマである。

モンベも元はハカマのやうなものであつたのが、働くやうになつてから下を狭めたのである。西の方鹿兒島あたりではまだキヒダレコダナシと

いつて、袖の短いもの、下に前垂をしめた、前垂は今は普通一巾だが三中でぐるつと廻るものである。畠仕事は虫が多いから裸ではやれなかつた。

住居もいろいろ問題である。どういふ風にしたら生活が楽しいものになるか、外部からの原因や自分達の欲求から考へ／＼して改善して行つたのである。温度、照明などの問題が一緒になつてゐる。

流行の上から流れてくるものは人情かも知れぬが、いくらかとり入れたいものであることも勿論考へてやらねばならない。

傍から同情ある人のアドヴァイスが役に立つ環境にあるのが農村である。主婦が読んで有難がるものを出してやらねばならない。学問を目的とした研究所ではない。どうしたらいくらかでも世の役に立つかといふ目的ではじめたのである。勿論学問のレベルも上げると同時に傍らさうした実学を人の為にする事もしなければならない。

歴史に出てくる女は袈裟御前や細川忠興の妻女の如く懐剣で咽喉を突かなければ出て来ない。その背後に多くの平凡な婦人があることを抹殺してしまつてゐる。

女の仕事の領域は信仰は勿論衣食のこと、蒔物の種を下す時期を知るのも多くは女の仕事であつた。女といふと姑から頭を押さへつけられてゐる嫁しか考へてゐないのはいけない。嫁から十年も経つた時の主婦の立場と家に於ける権限といふものを考へねばならぬ。女は本をよむ人を尊敬するやうにしなければならぬ。今の学校で女の事は男も同時に教へねばならぬなどといつて男の生徒に裁縫などやらせてゐるのは行き過ぎの甚だしいものだ。あ、した事がこれからの教育の大問題になるのだらう。共稼ぎしてゐても、それだから主人に御飯たきや衣服を縫ふことを要求するやふな女が果してこれから出るだらうか。又出てよいものであらうか。女には篤と考へてもらひたいことである。

何者も西洋の通りにはゆかぬ。北緯40°のヨーロッパで経験した事をその

ま、こ、へはあてはまらぬ。当てはまるかもしれないが、か、どうか、と考へぬといかぬ。

私の経験した一つの例は糖尿病といふ病気の妙薬にタラの木の芽を煎じて飲む事である。所が之は利く人と利かぬ人とあつて、別の山帰来（サルトリイバラ）の根を煎じてもよく利くのである。そこで私の姉婿がこの病気で山帰来をさがしてゐると、別に同じ病気の人がタラの木をさがしてゐる。

お互が譲り合つたらよからふにと思ふが、実は利く人と利かぬ人がある。それで私は医者にこの病気に二色あるのかどうかと聞いた事があるが訣らなかつた。同じ時代に同じ日本で同じ生活をしてゐながら、而も同じ病気で利くと利かぬとがある。まして、他の国でやつた事をこの国にあてはめてはかなはない。利くかどうかためしてからでなければならぬのだ。

午後三時半頃本田安次氏来所。辞典の事で大間知氏と打合せ、後先生と話さる。先生の紹介で暫く話し刺を通ず。

獅子舞の唄の多く揃つてゐるのは東北では弘前、遠野、上閉伊、下閉伊で、弘前には確か百何十篇かの唄がある筈だ。

墓獅子は番楽でやる様式であらう。

獅子のオガシは山の神といふ所がある。三頭立の獅子に多い。

津軽の神楽はいゝ。多分岩木山から出たものであらう。

同氏より山梨の霜月祭につき連絡依頼せらる。

戸田、亀山氏来所あり。

鎌田嬢より「本邦離島村落の調査―趣旨と調査項目表」「世帯調査表」

各二部（内一部三谷氏の分として）もらふ。

夜「海の伝承」書く。

発 通信（五）

受 三谷氏（山梨郷土研究会招待通知）工藤りやう

拜啓。暑中いよく御健勝の事と存じ上げます。扱去月二十四日逝去致しました本会民俗部長岡泰元氏の墓参を兼ね左記により民俗座談会を開催致しますので奮つて御出席下され度くこゝに御案内申し上げます

記

一、時 七月二十三日午前十時より

一、所 東山梨郡末里村放光寺（バス諏訪行放光寺前又は鍛冶屋橋下車）

一、お客様 津軽民俗の会常任幹事 森山泰太郎氏

一、会費 一金参拾円也（弁当持参）

山梨郷土研究会

（三谷氏添書に、猶八月五、六日下吉田で郷土研究会大会ある旨）

七月二十一日（金）晴、暑。

十時半研究所へ。「菅江真澄集」を見る。午後辞典挿入写真として東奥日報社撮影の久渡寺オシラ講写真大間知氏の乞により貸す。

亀山氏宮城江ノ島調査後津軽半島に採訪の由にて昨年採集の手帖、上磯篇第一冊貸す。なほ蟹田町丸尾旅館へ名刺紹介認む。

新渡戸博士来所。本日大藤、大間知、井之口、亀山の諸氏。研究所にて「高山稲荷の信仰」書く。夕刻新宿に出る。洗濯三点。

受 永野利春

発 工藤りやう

七月二十二日（土）晴、暑

朝洗濯三点。散髪。

午後二時二十分発塩尻行にて新宿より発車、甲府へ行く。途中大月まで富士登山者の為車内混雑甚し。六時三十分甲府着。県立図書館に三谷氏を訪ね、同氏宅に到着。図書館勤務望月氏と三人にて、ビール、寿司の饗をうく。十二時就寝

三谷氏より国語研究第三巻第六号貰ふ。甲府の夜頗る暑し。

発 最上三郎

七月二十三日(日)晴 暑

七時三谷氏宅に起床。八時半バス(諏訪村行)にて甲府発。三谷、望月両氏と同行。十時松里村放光寺着、同寺庫裡に小憩。十一時故岡泰光氏遺族、山梨郷土研究会民俗部会員十名と共に同寺墓地に岡氏の墓参。次で同寺の国宝大日如来、愛染明王、不動明王三尊を拝観し

同寺由緒など聞く。真言宗にて、以上の仏像何れも平安末期、鎌倉初頭のもの云。

同寺欄間その他建造物装飾に ~~林~~ の如きものあり林ノ字ならんと思ふに、カワクラ ~~林~~ の如きにて、方言ウシといひ川にウシを結ふといふ。富士川合戦に水鳥川原より飛立ちし為平氏敗走せし故事を倣ふといふ説あり。

昼食後座談会開催。司会竹川義徳氏なり。指名により余挨拶と研究所の現状につき約十五分語る。挨拶の要旨。

私は北の果青森県弘前市に於て同志と共に津軽民俗の会を運営しあり、地方の郷土研究会として久しき伝統と多数の仕事をした本会の事は予て承知ありし処、本日思ひもかけずこの席に到るを得たるは三谷氏の斡旋、諸氏の厚意は勿論なれど畢竟国の南北の民俗を比較することにより常民の歴史的生活を究明せんとするこの学問に従つて来た恩恵と存する。

先刻墓参せし岡先生とは遂に生前拜謁の機を得なかつたが、本月初めて

当地に参り諸氏と語るを得たるは同氏の忌日に当るを以て、同氏の冥ごの引合せと存する。津軽に帰つて本会の状況を同志に詳に報告し以て刺激と致したく将来とも支援と交誼を乞ふ。

座談会は盆行事を中心に各地の習俗を語り合いたり。

△黄昏時及雨降らんとする模様の折、山が鳴ることあり。これを安田の霊が鳴るといふ。多分浅間の鳴動の反響ではないか。

△安田をソウカク(宗覚)さんといふ、七ヶ所に祀る。

△神が憑き託宣などいふをカヂ(加持)がつくといふ。

△イチコは生き、口死二口をいふ。コツクリサン、アゲホトケ(重軽信仰)などあり

△恵林寺の杉を伐採し運搬せしとき村から村へ送った。村オクリと云。

△二十三夜のオ日待に小豆粥を食ふ。庚申は富士浅間と関連あり。馬と猿の関係。

△七月一日ハカマノ口ヲアケルト云。迎え火(高灯笼)は一日から灯す。

【柿の葉】△盆の供物は柿の葉に敷く

【手松を焚く】△迎火は十三日から十六日まで麦カラを焚く。猿橋では手松を焚くとて松の根を焚く。

【山バと死者】△死者の葬式の日天気がい、と山バをあてたと云、雨降れば山バをチガハセタと云。

△高灯笼の竿は竹であるが、盆柱といった(竹川氏)

【茄子馬】△茄子馬とて牛はなし。足はオガラ。流れた馬を拾つてイボにつければ治ると云う。

△墓前に洗米と茄子の切つたものを供へる。

△盆花は桔梗女郎花、月見草もありと云。

△シヨローロ棚を座敷に設く。

△盆勘定といふことあり。

△十三日の門火にドンド火といふ所あり。村端の川辺などで各戸より麦

稗を集めて燃す。

△百八燈^トで富士川が赤く見えるほど焚く。なげたいまつ。

△「オ盆サンコノ明リデオイテナツテ」「コノ明リデ来年又来て下サイ」

(望月氏)

△十四日に魚を喰ふ。仏さんに口を吸はれぬやうにといふ(猿橋、仁科氏)

△十六日日ノ出前に川に流す。

△彼岸ノ供物を中日ボタ餅、明ケ団子と云。

【盆中の葬式】△盆中の葬式には死者に笄を冠せてやる(仏が帰るのに何故来たとして頭を擲られるからと云)

△こゝの天王サンの神輿が植田を荒して歩くことあり。木曾福島にも同じことありと。

△デイダラボッチの足跡の伝説

○

山梨の神事芸能

① 東山梨中牧村 四月太々神楽あり。笛、太鼓、つゝみ。 同村

長渡辺幸氏

岡部の物部神社から来た系統のもの

② オテンズシサンとて人形を神に祀り人形廻しをする(西山梨郡小

瀬村「月刊山梨」竹川氏

③ 東都留郡川口村浅間神社、祭の日は春 神楽あり、踏足の裏をみせる。

④ 勝沼大善寺、左右は七角寺(共に真言) 山伏舞(剣舞)あり四月

十四日、田植。田植前、藤切の神事あり、養蚕豊祝のため切つた藤を

もつてゆく(竹川氏)

○中巨摩郡黒平の能三番、つゝみを胸に抱く。山梨師範学校の総合郷土研究に記事あり。踊大鼓つゝみなど皆世襲の家芸(同氏)

○山梨北都留郡小菅村小永田の熊野神社祭典(祭日四月頃)ハ神楽あり。

秩父系統だが最も盛大、歌詞あり(仁科氏)

○霜月祭りのこと知らず。

三時散会。三谷、望月、川手氏(図書館) 甲府へ帰り、余、竹川、仁科氏と信玄墓所恵林寺の外観を見、恵林寺前バス停留所附近の民家外観を見る。ツキ出シ二階(養蚕室)、棟の上に棟上式の幣束三本立つなど面白し。竹川氏種々説明。

四時半仁科氏とバスにて塩山駅に到る。塩山は鉄道開通による新開地なりと。四時五十六分同駅発新宿行に乗車、車内概ね閑散、仁科義男氏猿橋に下車。葡萄棚の低きさま、秋の□□□、笛吹川の下流、郡内の絹織物(織物に対する湿温室通すところ)、笹子隧道五分間、電化鉄道、甲府に静岡の鮮魚毎日早朝到着することなど風物、伝聞いろ／＼あり。八時五分新宿着。九時帰宅、入浴。

受 柳谷礼三、小井川潤次郎

七月二十四日(月)晴、暑

本日三四度二分、本年度最高温度

七月二十五日(火)晴、暑

十一時研究所へ。大藤、千葉、直江、井之口氏等民俗学辞典編纂事務の為、今野氏宅へ合宿の為出発。萩原氏と小生のみ。元大分民俗研究会員池辺弥氏と刺を通ず。

受 葛西重蔵、相馬キミエ、木村勝代

七月二十六日(水)晴、暑

けふより「津軽の海村」書き始む。午後仮睡

受 幾代 銀行小切手、三千円 松木明、工藤規 舟魂祭のこと

七月二十七日(木) 晴、暑午後驟雨

十時渋谷大阪銀行支店にて銀行小切手三千円受領。十一時研究所へ。堀、直江兩氏来り話す。千葉氏より原稿促さる。ワカサとベンザイ船のこと書くに決め取りかゝる。

午後四時帰宅後夕飯を済まし、ポストンバックに仕度して西萩窪能田多代子女史を訪ひ数日静好寮に宿泊せしめられたきこと申出づ。

女史より先年柳田先生、令嬢と東北巡遊の懐旧談あり。頗る面白し。

【ベンザイものを売る】南部にてベンザイ店、ベンザイ物コ売店とは至つて安価にして貧弱なる子供相手のさゝやかなる品を並べおく店のことなりといふ。

【津軽の娘の恐山参り】南部恐山に津軽の女、結婚前に必ず一度参るべき慣習ありしといふ。嘗て折口先生にこの話をせしに即ち女史に示されし歌を書きて賜ふ短冊あり

をみなごをゆくみちなしといふなかれおその山はむかふとぞきく

迢

同夜宿泊(二階十一号)に、蚊帳は同宿の山田孝雄博士令息のもの、着物は女史の夏衣なり、山田博士の用いられし蚊帳に女史と大笑することあり。

原稿草稿成る。雨夜に到りて止まず。十二時就寝。国電の響枕辺にきこゆ。

発 本田安次、幾代、井浦芳信、木村勝代、葛西重蔵、工藤規、三谷栄一、竹川義徳、仁科義男、工藤浅吉

七月二十八日(金) 雨時多し霽れて蒸暑

八時洗面、原稿浄書。女史よりコギンのこと聞かる。背負籠のことなど。【カコペ】南部の農婦時種を入れる籠を常時腰に帯ぶ。カコペといふ。即ち西郡大山のカコペ投げの意通ず。

十時半出て十一時半研究所着。高橋嬢のみなり。原稿浄書つゞく。午後竹田旦氏対馬より帰り採訪断片をきくに対馬の女戦時中釜山へ電髪しにゆく、日本への帰属の希望強し。四時東北澤に寄り五時半帰着、洗濯。夜、稿成り「南風と交易船」と題す。研究所原稿用紙200×21。

受 神良治郎速達、桜庭氏よりの米托送のこと 松野武雄、菊地久雄、柴田重男、石塚尊俊出雲民俗12号 山梨郷土研究会 下吉田の研究会案内と出席勧奨

七月二十九日(土) 雨 時々豪雨下ル

十一時研究所へ。「南風と交易船」鎌田嬢に渡す。

【交通語彙】先生に山梨郷土研究会に出席の顛末申上ぐ。けふ交通語彙カードを見る。

先生の深遠な学問は、かうした丹念なカードの集積なることを知る。この語彙は池田弘子氏の手により別に成稿しあり。

発 松野武雄、菊地久雄、石塚尊俊

七月三十日(日) 晴 時々雨 蒸暑

八時起床。十時能田女史居室ニテ魯仙画弘前風俗絵巻を示し、種々談話。木曜会、研究所、文理大学同人のこと、鈴木棠三氏のことなど丸山氏と三人にて語る。昼食は以上三名に五戸の藤田嬢と同室にて会食。折口先生短冊色紙数点、「松風帖」(柳田先生題箋)、西郊民俗談話会の出席者署名、先生の報巻頭にあり。かなたこなたにうぐいすのこゑの下句をつ

折口先生の上旬附などあり。女史の蔵書はすべて将来國學院に寄贈のこと折口先生との約束あること、牛尾三千夫氏短冊、齋藤吉彦氏のことなどさま／＼語る。三時辞し、そのまゝ、北澤古□氏方に帰宅。一日より女史日光に旅行、昨夜帰る。日光土産箸三膳（内一塗箸、弁当箸にせよとて）賜る。

晩高□兼介氏を訪問十時まで語る。

受（二十九日） 最上三郎、三浦たゑ

【舟をあげる神】 けふ女史の話に、五戸町鹿内の白山様には小型の舟をあげる由、之に酒を注ぎて流すことありといふ。

七月三十一日（月）晴、暑し。

八時起床、十一時研究所へ。竹田氏対馬の民俗写真持参す。

【ユリ】 神祭の神酒を載せるユリといふものあり。彦岐の巫女の持たるユリといふ箱と通するものか。天道信仰のものもあり。午後二時より月曜談話会あり、津軽の海村生活につき述ぶ。

【採集方法の吟味】 巡遊の地点、採集に於ける話者の選択、女の伝承者などにつき先生に訪ねられ答ふ。今後離島調査の採集方法を検討する意味でしたいといふお話あり。

- 次で先生の間を中心に
- 1、北越の移住民のこと
 - 2、東湾の鱈漁
 - 3、コンブ浜のこと、4、十三の舟霊祭
 - 5、夫方制度
 - 6、出稼、7、高山信仰、8、海難と略奪部落
 - 9、阿波国三之介の傳承
 - 10、□□の話
 - 11 椿山、12、キツ舟
- 其他について述ぶ

先生の注意

1、今日の採集は問題の項目をもつと制限すべきだ

【ホコ漁】 2、アワビの刺漁の如きものは東洋殊に日本以外にはない

漁法だ（モリ□東□、ホコ□□□）この二つの語の系統に注意

【丹後船】 3、丹後船のことを調べる必要がある。

4、越中衆は漁が上手で漁場をもたぬのでよく方々で嫌はれた。

5、深浦の奥の深山にはまだヤマイヌなど棲息してゐるのではないか

6、下北の脇野沢（？）の茶店で休んだ時に軒下に燕の巢の板のやうなものを□出しこれに熊の片手をあげて悪魔除けの呪にしていたのを見た事があつた。北海道から泳いで来た熊だったときいた。

午後五時閉会。座談中、主として橋浦、大間知、和歌森、竹田、大藤、千葉の諸氏より質疑あり。当日の出席者

橋浦 竹田 和歌森 大間知 大茶 千葉 園部 森山

柳筆 □

○ 橋浦 ○ 竹田 ○ 和歌森 ○ 大間知 ○ 大茶 ○ 千葉 ○ 園部 ○ 森山

外に高橋、鎌田両嬢、先生に原稿依頼に来た欧文社記者など

閉会后魯仙弘前風俗画卷を先生に御覧頂く。頗る興ぜらる。新宿にて夕飯後沼袋にゆき十時半帰宅。

受 壬生田昭三郎、亀山慶一、
けふ神書店より鉄道便木箱一梱にて桜庭氏よりの米五升到着。

八月一日(火)晴、午後驟雨

昨日の疲労甚し。朝渋谷に出づ。昼洗濯三点、午後より夕方へかけ洗濯
五点

鈴木実君山形へ出発、神書店の木箱開梱。

夕飯後、高橋専八氏夫人よりうどん配らる。夜入浴。

鈴木君に結城哀草果氏に執筆依頼の短冊三葉托す。

発 神良治郎、桜庭武則(4)、三浦たゑ、壬生田昭三郎、手塚勝治

八月二日(水)晴、時々驟雨

十一時研究所へ。来客辞去後先生と語る

1、岩崎の真澄遊覧記写本のこと、相内の三和氏のこと

【みちのやちまた】○みちのやちまたは未見だ。筆写しておくべきだ。

真澄が津軽へ行つたのは殊に早期だから津軽の真澄研究を継続すべき
だ。真澄の交友のことなど、これは民俗学ではないが君などはやらね
ばならぬ。子孫の家へ行つたら、きつと何かまだ書いたものが出てく
るだらう。

○相内はどうして過去に於て発達したのだらう。相内の狐の話は面白い
2、十三のこと

○小倉慶次君は、私が十三へ入つて一番大きな家(小倉常蔵氏)に休ん
で、娘と能田女史と三人で、御飯を食べてみると、前に来て頻りに話
かける者がある。これが慶次君だった。小倉で船霊様を見たといふが
もう覚えてゐない。

【十二フナダマ】3、フナダマを十二体といふが山の神にもいふことで、
数に限らず多いといふことだ。

【戸棚に祀る神】4、太子講を戸棚に祀ること、女の子の多い家で祀る
ことは初めてきいた。エビスを戸棚に祀る例は多い。戸棚も普段他
の用事に使はぬ所だから仏壇と同じことだ。

大藤、大間知、竹田、井之口氏に魯仙弘前風俗画卷を見せる。大間知氏
と婚姻のこと話す。為正氏夫人葡萄酒振舞はれ、煎餅出る。

夕飯後、仙秀郎へ参る。仙秀先生へ鈴木馨氏贈る所の青森師範学校編「郷
土号 一」転贈さる。吉原三業組合発行「洞房語園」タイプ印行74頁

昭和十一年十二月発行 新吉原沿革誌編輯部(限定百部之内第四八号)
借留、目次左に、

新吉原沿革誌編纂に就て

市川伊三郎

吉原創始者庄司甚右エ門とその墓所

平野龍之介

吉原の三浦屋と上総の江沢家

石原慎吾

「たけくらべ」のモデル

荻野浪平

庄司甚右エ門の肖像

相馬三吾

明治の吉原本

永見文太郎

金瓶大黒の「松の壽」

佐田善太郎

旭如来に就て

高藤直一

明治三年吉原徽毒院取□□

庭瀬信太郎

吉原大門口高札考

市川柳景

口絵 庄士甚右エ門肖像、

同房語園 元文年代刊三卷 享保五年庄司勝富著

初代甚右エ門より四代目と云。庄司又左右衛門と称し、延享二、八、八歿
(七八)

【アカの六月】①弘前で炎暑のときの言い方に「アカの六月」といふ説あり。

②葬列寺門に入るや仮屋を左から三度廻る。

【カゴダミとオドダミ】仮屋を何といふか。ヨテンといはぬか、ダミにカゴダミとオドダミ（お堂のことか、板コシといふ）の二様あり。板輿を担コシぐのをヨテンといふ。

【ヨテン】③芝居のヨテンとは自雷也の如き裾の裂けた着物をいふが別にハナヨテンあり。

【ハナヨテン】捕手が手に花の杖をもつて現れるをいふ。即ちヨテンはとりまく事ではないか。四天王なども通ずる語か。四方を取巻くことなるべし。

④私の家の葬式では一杯飯を持つのは出入の者だった。新町の嘉助しんちやうといふのがきまつて持つことになつてゐた。四華は次男が餅、近親は上下に素草鞋を穿いた。（以上仙秀先生談）

仙秀先生近業に、西鶴語彙考証ともいふべきもの稿本三冊、近世物売尽といふべきもの数冊あり。行商人百項あり。共に頗る面白きもの。後者毎項挿絵あり。

驟雨到り、十時辞去、洋傘借用。

八月三日（木）雨

朝来雨止まず。終日籠居。吉川英治「親鸞」三巻を読み、大衆小説の極めて悪き後味のみ残る。夜「盆の火」書く。母の新盆を弔ふ心あり。

受 今泉美智子書留一千六百円送金、幾代光子の手紙と共に
発 幾代、渡辺初太郎

八月四日（金）晴、時々驟雨

十二時頃より早曉にかけ暴風雨となる。朝に到つて漸く止めども雨雲低迷し折々時雨あり。正午より神田へ出かけ有精堂に山崎氏を訪ね「米会話」十部弘前今泉美智子宛送本を依頼し代金支払す。

山崎氏より今泉博士著「国語学概論」一冊貰ふ。古書肆街を廻り関敬吾氏「昔話」を求む。駿台下明治堂に 山村語彙四五〇、雪国の民俗二五〇、とあり。夜入浴後「盆の火」を纏む。再び雨到る。

八月五日（土）雨時々晴

十時研究所へ。成城学園下車の際豪雨到り終日降りつく。和歌森、大間知氏あり語る。後井ノ口、福島氏来る。辞典編纂の為め月曜より能田女史方に合宿すと云。南越民俗の瀬川女史「きたまへ船」を読む。ベンザイ船との関連で考るべきものとして有益。語彙カード霊地、霊物、巫託宣、示現なぞ見る。殊にミサキのこと注意す。
夜に到り屢々驟雨あり。

受 柳谷礼三、木村勝代

発 柳谷礼三

八月六日（日）晴、暑

連日の雨全く霽る。正午御茶ノ水駅ヨリ本郷古書肆街歩く。木内書店の語彙漁村、山村、産育など何れも高価なり。本郷三丁目より湯島天神に抜け広小路より柳島行にて浅草寺に詣で六区街を見吾妻橋上に立ち隅田川の濁流を見る、上野松坂屋に入り駿河台に出づ。明治堂書店にて山村語彙を求む。七時帰宅。

籤音觀草淺			
吉三十四第			
好	貴	追	月
事	人	鹿	桂
始	乘	映	將
相	遠	山	相
宜	箭	溪	滿
<p>のぞみかないてしあはせとなる</p> <p>だいひのぼさつのゆみやたのまば</p> <p>めあてのえものはやまたにへだつ</p> <p>やがてまんげつさいさきよけれど</p>			
<p>○信心たざれば思うこと目先ありてならず、信心とは真心なり。観音大徳の菩薩は誠意ある者にむかいて惜しむことなし</p>			
<p>願望 かなうべし 病人 本づくす 待物 来る 失物 出ずべし 縁談 よろし 賣買 利あり 其他 よろずよし</p> <p>▽人に手なくんば我の山に置ると雖も終に得るところなきが如く借の手なきものは三寶に逢うと雖も得るところなし。心地観照</p>			
◆すまひ願を遊寄御の費設建堂本◆			

発 今泉忠義、成田直道、幾代、今泉美智子

八月七日(月)晴、驟雨

朝洗濯五点、驟雨あり、晴れて暑し。山村語彙を読む。夕刻より風あつて涼し。入浴後万葉印刷所に行き志賀氏と語る。名刺出来持帰る。高槻夫人よりおはぎ配らる。昨夜浄書せし「盆の火」(二百字七枚)けふ東奥日報社下山俊三氏宛送る。

発 下山俊三 民俗学辞典収録オシラ写真の諒解を求む。浜館貞吉、三谷栄一、亀山慶一

八月八日(火)晴、暑。この日立秋

朝曇天蒸暑し。十時半研究所へ。鎌田、高橋両嬢と研究所の現況につき交々語る。能田女史の噂頻りなり。先生の昭和九年京都大学にての講演原稿「民間信仰十講」「日本民俗学の提唱」「祭典の意義」など見る。

【人形資料】「人形資料」カードを見る。ムシオクリ、ボウノカミ、ニン

ギヤウオクリ、カシマ、ツリ、カシマフネ、タナバタフネ、タナバタウマなどいづれも有益なり。午後土佐桂井和雄氏来所にて刺を通ず。先生と鼎談。

【六月一日】六月一日の問題

【祇園信仰】○祇園の神事が押出して東北の果まで祇園サマになつてしまつた。又は天王様といふ神の行事が多いが祇園以前の形が問題である。

【祇園以前の事】【水の神と六月】水の神が出てくるのは六月は水無月といつて水の必要な月だつた。疫病の事を主としたのは都会の事で農村では旱天、大水など農作の妨げを防ぐのが目的であつた。

【女の神】サツキのサといふ神もサツキでなくなつて六月になつて了へば同じ神でも名が違つてくる。稲刈の場合でも神をサといはない。

【慎みの月】六月は慎みの月だつた。

【田の草取り】草取りもいまほどしなかつたらしい。成長した苗から穂が自然に出てくるのを期待してゐたのであらう。九州では祇園といふ神が少い。川の神祭りといつてゐる。尤もこの川は井戸の事だが。一日は晦日ほど気がつかない。朔望に気がついたのは暦以前の事だらう。六月一日は富士では重んぜられる。

【正月との関連】六月一日は正月と繋る饗があつて、東北では正月に挨拶に行かぬ家の女がこの日挨拶に出ればいゝとされてゐる。

【氷室と六月一日】△(桂井氏)氷室と六月一日の事。この日氷を食ふことは宮廷行事以外に何かあるのではないか。西へ疫病を流すといふ考へについて。

【地下へゆく思想】○近世の死後の概念では土葬をするから地下へゆくと思へた。然し土葬も新しくして風葬が古い。地獄といふ思想も古くからあつたとは考へられない。底の国といふが底は必ずしも地下の事ではない。底が下だといふのは後の考へ方だ。

【山の向ふ】ソラといつても中空ではなく、アメ、アマは山の向ふの事だ。

【初詣りの飾り】△子供の初詣り嫁の初詣り（正月か祭礼）に門口に四斗樽をおき毛氈を敷き人形を立て竿の先に女の帯を立てる風が土佐にある。詣でて帰ると近所で樽を入れて祝ふ。

○祭礼はいろ／＼の飾り物が出るが正月は個人祈□で共同のものではないと考へてゐる。

【ユドノ】△便所をユドノといふ事

○ドノといふ理由はない。ドノは家の中心で晴れの場所だ。便所をいふのは何かの誤解だらう。湯殿をドノといふ事さへ新しいものだと思つてゐる。上り口の所（玄関の）をヨーマといふ所がある。

宮良当壮氏来所。東京書籍の人々教科書編纂のことで会談。

水蜜桃とカルピス出る。桂井氏と少時語る。同氏軒に出す禁厭につき報告を求めらる。宮良氏と刺を通ず。朴訥容貌野人の如し、土佐方言調査につき桂井氏と打合せらる。

「加能民俗」3（新刊）研究所より一部借覧。

帰宅後水浴。夜浄書ノート書き。「村・家」終る。洗濯二点。

受 桜庭武則

八月九日（水）晴、暑

十時半研究所へ。午前風立ちて涼し。午後日射強く暑くなる。

人形資料、交通語彙、雪具などを見る。

戸田謙介氏来る。午後瀬川清子女史来所。一昨日対馬の共同調査より帰京せりと。学会と村の連絡よく、全く調査の便宜よろしく一切苦勞せず。之に比べて従来の採集には随分つまらぬ骨折したものなりと述懐あり。青年民主新聞先生の盆踊りの原稿依頼に来るものあり、鎌田嬢に行□れる。鎌田嬢、先生の古き写真取出し見せらる。

結婚の折のものにて紋付に白襟襦袢のもの、石神問答掲載のもの、真澄翁終焉碑の前に座せられしもの。伊波氏一週忌のもの、等々、竹橋駅頭にて大藤氏撮影の洋服姿は鎌田嬢佐藤ハチローの如しといふ。梅鉢を側に春の日向に十徳を冠り縁に坐りたるもの等々。

御進講の折は天皇様を御慰め申上らるるつもりにて面白き昔話（福慈筑波の山の話）などせられしに皇后陛下大に笑はせられしと。この折モニングにて参内の為、靴に綿をつめられ、靴下二重穿かれしなどせられしといふ。

夜に入り涼風起ち虫の音などきこゆ。

「古き漁法」「イソモノの採取と慣行」浄書す。

発 相磯貞三、松木明

八月十日（木）雨後曇り、涼。

早晩より雨降り止まず。昼に到り漸く霽れ涼味頻り、終日汗ばまず。

「網・鱈漁」浄書。専八氏夫人病臥、夜兼連君西瓜持参。

受 桜庭武則 外食券、浜館貞吉、新生国民新聞共、葛西やす、山内耕

子、鈴木実

発 桜庭武則5、葛西やす、鈴木実

八月十一日（金）晴午後豪雨、涼

午前曇後晴、洗濯三点、「鯧と鰯」「釣漁」「烏賊漁」を浄書。

午後午睡二時間、四時より豪雨一時間ばかり止まず。「加工と販売」書く。

夜入浴、「船」「禁忌と沖言葉」浄書

受 工藤浅吉、盛忠七、井浦芳信

八月十二日晴、暑、夕刻驟雨、夜涼

十一時研究所へ。直江、福島、井之口三氏。午後関氏来所。

竹田氏依頼の能田女史原稿「箕作りの村を訪ふ」400×19を高橋嬢より受領。津軽民俗第三号へ掲載寄稿のこと女史と約あるによる。研究所にて

「風・潮・星」「作業衣」「海の労働」浄書。

「島根民俗」復刊一号見る。主宰牛尾氏。福島氏と同行帰る。

六時帰宅。けふ祖父□洋子来訪の由にて書付を見る。弘三郎より電話あり。出張滞在中の由にて明後日神田青森県事務所を訪ぬる約束す。

夜「海の労働」書き上げ、「津軽の海村」ノート第一冊書き終へ、第二冊に着手。「海難と死霊」浄書始む。

笹塚にて時計のガラス、鎖付換へす。

受 小山敏夫、今泉美智子

八月十三日(日)晴、暑。

十一時研究所へ。「海の怪異」「流れ仏」「ペンザイ船」浄書。

大藤氏より島根牛尾氏よりの書翰によるしくとの伝言ありと伝へらる。

研究所にて香川県教育委員会発行、民俗採集報告第一輯「高見・佐柳島民俗調査報告」(香川県民俗調査会編)を求む。

午後二時より月例研究会開催

柳田先生、瀬川、大藤、堀、和歌森、直江、竹田、桜井、その他すべて二〇余名。

(1) 遍路のこと(小池氏)

【遍路宿「おんやど」】西国八十八ヶ所の遍路に遍路宿あること。物乞ひを御修行といつて遍路の半数はこれをする。乞食はつまり遍路渡世で、

記録に一人で遍路二五〇回のものあり。四国の人々の遍路に施するのは深い信仰生活からであらうこと。

【嫁入前の遍路】四国では嫁入前に遍路をさせる。四国全部又は一国巡礼として自国の札所ばかりを廻らせる。これが一種の教育であつた。

批評(○は柳田先生) △小池氏

○八十八所の出来る前にもホイトはあつた。東北の一寸法師が長者の娘を乞ひ唇に米の粉を塗つた昔話を思ひ出す。東北は八十八所巡礼の慣習とホイトが合体したのだ。

【撰待】撰待の記録の古いのはいつ頃か。撰待があれば遍路もあつたと見てよい。

八十八といふ数を決めたのは新しい。六十六部との関連を考へる。

△三十三所の方が古い。

○撰待は民家でやる。道側に出張してやるのは勢ある時期だけだ。

【人ナシアキナヒ】明治に私が高岡郡で人ナシアキナヒをしてゐる所のあるのを見た。求めた人は竹筒の中に銭を入れてゆく。

△坂東三十三所でもやつてゐる。乞食の服装がよく残つてゐた(判をおした着物負い笈)

○辻堂でねてゐると、次に来た者が介抱してやらねばならぬ。死ぬと死人の物を貰ふ。橋浦君などの行つた頃は村にオチャゾウといふのがあつてそこに泊まるといつた。撰待といふ字の一番古い所は何だらう。謡曲の佐藤兄弟の所に見えるが。

堀、撰待と書く。接では如何。奈良県招提とは関係がないか。

○今でも撰待だ。

△泊める村と泊めぬ村がある。

○きつと泊めて懲りたからだらう。

堀、牛込の善根宿のこと郷土研究にあつたが。

【ゼゴンヤド】○あれは僕が書いた。ゼゴンヤドといふ。

【「おんやど」】△「おんやど」の外に泊めてくれる家がある。

【マハリヤド】○マハリヤドと関係があらう。ゼゴンは寺を通してゐる。

【越後のゴゼ宿】福井、越後のゴゼ宿の如くきまつてゐるか

○この問題はもつと具体的に一ヶ所をやる必要がある。質問條項をもつてゆけば土佐、伊予の南ならやれる。関東も秩父などの信仰の深い所もいゝ。

【高野聖】【ヤドカ】高野聖もセツタイ宿ばかり探してゐる。村の入口で大声で「ヤドカ」といふのがヤドカのもとだといふ。

【太師信仰マツから】八十八は寺としては古くても巡拝は新しい。お太師様の流行したことからだ。千葉の□□で大師詣が今も盛で、上の村、下の村に大師があるが村人は船で渡つてゐる。然しあれは金をつかふから修行ではない。

(2) 対馬の共同調査報告

(天道信仰を中心に) 和歌森太郎氏

△サゴミナトの天道

ツ、マハリの天道と共に対馬の三天道といふ。サゴ川の西側に山あり。この向側にシゲがある。

【母子神】シゲは母神で天道は子神といふ。

【飛ぶ神】某天皇病氣のとき祈祷僧が対馬の天道に祈れといふので使を遣すと天道は飛行して来て祈祷したら、憑物が岩になつた。これを叩き壊して退治した話あり。

祭り方、中央に鏡がむき出しにしてある。

【積石塚】石の六尺ばかりの積石塚あり、山の頂上近く人工的な石の積石あり。

【二十三日】祭りは定期に年一回、正月二十三日(今は新の三月一日)。

【二十三日夜】正、五、九の二十三日は対馬では月待チの日である。

サゴの中に墓地の遙拝所といふものあり。天道山に地つゞきになつてゐる。

盆は無関係で彼岸七日間か村人共同で毎晩拜みにくる。

【成年式と天道】十九才は元服、十七才でカネツケの成年式は毎年十二月十五日にやるが、翌年正月二日にこの若者が天道に詣でコヨリを親指と小指で結ぶ。

△ジタル

【天道さまのシゲ】「天道様のシゲ」といふことあり。シゲ地は切拓かれてゐる。

シゲコウジンといはれる祠あり。もと大きな森に包まれてゐた。

コウジン、カナグラサン、エビス神を祀つてゐる。

コウジンの後の山にカナグラサンとて高い処あり。頂上にやはり積石塚あり。真中に瓶がある。

コウジンシゲの祭りは三月二十八日、カナグラサマは韓マからやつて来たといふ。

【ヤクマ】ヤクマといふ行事あり。六月初午の日。

各家から小麦藁を集め中に麦をつめた六俵を氏神(イクサ神)ニ供へ後、子供等が俵を引張つて廻る。

△イナ部落

【家がシケル】シゲ地あり。入ると腹がいたくなる。家がシケる。(家運衰微)といふ。

【祟り性の強いアラ神】祟り性の強いアラ神である。十一月十七、八日が祭日。

【榎は魔の木】中心は松と榎で、榎は魔の木といふアラ神様は炊事場の中にあるカマド神も地講神マをもいふ。シゲコウジンはその後者を指す。

△キサカ

【天道はオテントさま】八幡社あり。境内地にもと天道を祀る。オテントさまだといつた。

この村は潔癖性の強い村で不浄人が神前を通らない。

【ヤクマ祭】六月初午にヤクマ祭りをする。神社の前の浜で石の塔を積む。

【頭アヘ】頭アヘは年に三人で内一人はくり返して二度やる。この二度目の人がやる。年令順に廻つてくる。

【ムギアマサケ】トウマへの家で麦甘酒を大量に作る。

【クサビツリ】前日クサビツリをする。前日早朝に親戚や村の若者が小魚を釣りに出船する。トウヌシの親類の女が食事の仕度をしてやる。

【二匹魚】釣つてくるとデキ(ニワの広場)に火を焚きあぶり、大きいのを二匹天道さまの供物とし、二匹づつ組んで一組にして部落民に食べさせる用意をする。

【ホサ】当日日出前に甘酒と小粉団子、クサビを供へオテント様に供へる。

【浜出の行事】お参りのあと、浜で蓆を敷いて浜出の行事をし、ホサ(社司)が祝詞をあげ石の塔を積む。頭毎にするので三基出来る。

【オミキアヘ】オミキアヘといつて村の小頭(常会長格)から来年の頭をうける人に神酒を渡す。

【石塚積のいはれ】石ノ塔を積むいはれに、男子の誕生のお礼ほどこきだともいひ、男二十四才のものは特にやつたともいふ。

△ミネ村の本村ミネ

【天道シゲ】天道シゲといふものあり

山手の方が天道で天神様だといふ。田に近い方がシゲで方向は東向。

【ウバガミ、ムシガミ】シゲの所にムクの木あり。根元に、ウバガミハツトウシン、ムシガミなどといふ蜂蜜の巣あり。川をヤクマ川といふ。後の山をヤクマ神と呼ぶ人あり。

【夜泣の願かけ】正月五日弓矢を作つて祭る事あり。夜泣の子の願かけにシゲに団子十二を卵形に供へて治つたので本当の卵を十二供へた話あ

り。

崇る神で、シゲの木を用材に家を建てたら家がシゲつたといふ。

△吉田

吉田川のほとりに川あり、天道を祀る。

天道は宗氏以前のアビル一党が祀つてゐた。

【男だけで甘酒】旧六月初午にトウノ行事あり。男だけで甘酒を作る。トウを勤め上げた上でないと社内に入れぬ。

【御幣を立てる】御幣を立てる事が中心の行事で、七尺五寸の幣一本と中位のが二本、その他が竹の棚にさゝれてゐる。何の祠もない。月の数だけ幣帛を垂らす。

立てる時刻は日出前。

七カケ半(一カケが二匹、川魚)を棚の上に供へる。

トウマへは一週間前から潔斎する。部落はヤクマヨリとて村集会をする。七つのシゲあり。サゴの天道の土を運んだといふアンドウのシゲといふものあり。

△マハリ(廻)の天道

【ユゴモリ】十一月初(壬)の日に麦甘酒をつくる。十二日目にユゴモリとて休日をする。

(仮尾では七月廿日天道マツリ

サゴ、キサカ、オノミに両幕制。サゴに天道シゲといふ地名あり。)

△一平

【ナ、タケ、ナ、シゲ】ナ、タケ、ナ、シゲといつて七つのオタケドン、七つのシゲといふ。

タケの中の大嶽(東の山)に十一月初酉の日に神官が上り、一般村人はユゴモリして慎む。ホサは七つの幣を持つて大岳に夜明け前に昇り他の六つのタケを数へ大岳を中心に三本づつ左右に立てる。七つのシゲの祭りも同時に大岳でやる。タケとシゲ(こゝでは天道)は岩鞍である。

【盆踊】ナシゲキヤクマのシゲが元祖だといひ七月十六日全部のシゲを数えて幣を立て盆踊をたてる。

盆踊をシゲ地に立てるのは他にもある。

六月初午のヤクマ祭りもする。麦のホガケ（新種をかける）もする。

カンジヤのシゲといふのがあつた。国分社家のアダ名になつてゐる。

【シゲと墓】六月廿八日、十一月廿八日が祭の日で、シゲは墓を嫌ふとて遠ざけて作る。

△イマザトとオザキ

【霜月七日】六月初午のヤクマあり。霜月七日が祭りといふ。神無月にこの土地の神が出雲へ行き、まだ帰らぬ留守中山からシゲさまを降して祭る。その神送りの行事である。

【カナグラ御幣】七七本のカナグラゴヘイを立てる。（七六本は一尺、他の一本は長く文銭をさし、マサキの葛でく、つてゐる）

△トヨ

【ヤブサ】ヤブサとて壱岐、西九州と同じ聖地あり。

△ツ、の天道（天道の本場といふ）

【塔を直し山を望む】石積塚あり。前に拝み所、塔を直してタテラ山を望むかの様である。

【鳥居を献す】願ほどきに稲荷同様鳥居を献する。

頭の行事あり複雑

正月十四日の夜トウのオワタシの行事あり

正月十四日のヒマチ、十五日の昼にかけて伊勢講の部落では赤飯をもつて□んでくる。神仏習合の甚しい所である。

日の出の方向に幣を立て、おみ酒と洗米と、餅十二箇（閏年十三箇）を供へ天道社の脇北東の処にカナグラマに一ヶ所に一本づつ立てる。

クゾウが読経して、若者が立てる。

△クニイナカ

【地主神と天道】一般の屋敷で地主様を祀つたが、天道地の前に同じものを祭る。

「アレ」ではオヒデリ様の中に地主神と天道を合体してゐるといふ。

大カナグラ、七五本のカナグラ幣を立てる。

【山下メ】祭りの前日は山下メとて死人が出てこの山に近い所を葬列が通らねばならぬ時は忌むで葬式を出さぬ。

○

【母神とワタツミの神】○天道トシゲは別なものだと思つてゐたらしく、いてゐる。母子神がワタツミの神と関係あれば大きな問題になる。神功皇后も八幡様と母子神で、今の民俗学界でこの問題をどの程度まで解けるか期待したい。

【メウブ】瀬川、メウブの方から見た天道信仰のこと

サゴのメウブ二人はホサの助手で鈴を振り舞をまふだけだといふ。天道祭りには浜辺で舞ふ。母神といはれるニヨウボウ神の神体は女の髪をワケタ神像で、台下に坊主の名三人と大きく巫女の名があり、時代も足利頃で、巫女が願かけして作つたかと感じた。

墓に行つたら、椿の林の中にあつた。上段にメウブの墓あり。主人の墓と並んであるが主人よりも神女の方が大きい。今は妊娠四ヶ月のカネギトウ、地主祭りにはメウブが歩いてゐる。メウブは肥料をいぢらぬ。

【メウブとホサ】○メウブとホサとの関係で、父がホサで娘がメウブだといふ事はないか。家の系統は遠く違つてゐないか。メウブのホサに対する威信はどうか。

【シヨウレイ】和歌森、メウブの子はシヨウレイ（言儼）といふ

竹田、今里では夫婦の例があつた。

【天道はメウブの子】和歌森、サゴでは天道はメウブの中子といふ。

瀬川、メウチといふのはどういふわけか

○ 音韻現象だらう

【甘酒】和歌森、甘酒は堅ねりのものを神に供へる。

【柏の葉に包む甘酒】○諏訪では柏の葉で包むといふ。トウ制度が対馬にあるのは面白い

瀬川、石積みは成年式であげてものが翌日積むときいた。

【逆杖】○逆にして立てるのは杖だけだ。杖は天の方を持つから。

シゲは神を祀る場所か、神そのものか
和歌森、里宮だといふ印象を受けた。

【八月十五日】○「八月十五日考」（民傳八月、直江氏）の批評をすると

【正月祭り】この日は何等では確かに正月祭りで前晩を歳の夜といふ位だが、内地は時期的に少し早い。従つて形式だけで、十一月が先祖祭と感謝祭だらう。

【ホカイ】ホカイは全ての精霊に施すことだ。

【ナオラヒ】ナオラヒはもと神が食べてゐる時に同時にこちらも食べることで伊勢では共饌といつてゐる。相饗アヒヒすると考へねばならぬ。下げて後頂くのではない。

【田の神と祖霊】和歌森、対馬では田植えのときオヒルモチの持つて来たコビリを水口に供へ、「キヨシ〜」といつて次に先祖・俗有名をいふといふ。

【真宗部落】東浜には真宗部落多し。

【シゲが氏神】瀬川、サゴのある家ではシゲが氏神であつた。女房神も氏神だといふ。

【シケとシゲ】○シケルとシゲとは別だらう。シケは自動詞で海がしけるのも海自身が荒れるのだ

和歌森、土地の人はシゲは茂と思つてゐる。

○人が書いて教へたからだ。とにかく厳原では町の名になつてゐる位だ。天道茂といつて。

【オヒデリと天道】瀬川、オヒデリと天道と通ずるだらうか

○山の上を天道山といふ事をオヒデリ山といはぬか

【榎を植ゑる習】瀬川、家の前に榎の大木を植ゑる所多し。

○

和歌森氏より現地資料写真廻覧。竹田氏より第二回年会日程及研究発表者予定発表あり。五時閉会。園部氏同行にて帰る。

夜「ベンザイ船」論述「若者組」「年中行事」書く。

受 幾代、小切手三千元

八月十四日（月）晴、暑

朝洗濯五点。「年中行事」書きつぐ。

午後午睡。七時飯田町青森県事務所に出張宿泊中の弘三郎を訪ね、共に沼袋に赴く。十時帰宅。「年中行事」浄書了。

受 工藤桂子

発 神良治郎、工藤桂子

八月十五日（火）晴、暑

朝洗濯二点。午前「山カゲ」浄書。午後渋谷大阪銀行支店にて小切手支払をうけ、地下鉄にて上野に到る。弘三郎の帰郷を見送り、黒門町文行堂、廣田書店に入る。文行堂は寒葉齋「魚」横物あり。頗る不味きもの、箱付四百円といふ。鏡花短冊一千円、龍之介千二百縁と見ゆ。

地下鉄にて渋谷に帰り五時帰宅。高橋氏夫人より物菓を頂く。夜入浴。

「信仰事象」浄書初む。

発、父、山内耕子

八月十六日（水）晴、暑

十時半研究所へ。大藤、大間知、堀、和歌森、井ノ口氏等辞典編輯相談しあり。

【信仰事象】「海村の傳承」にて第二冊書き上げ、第三冊目にかゝる。

四時半帰宅。そのまま高□氏留守居。同所にて夕食。十時半まで「海村の傳承」浄書し了る。十一時半高□氏方にて入浴。

受 木村勝代

八月十七日（木）、晴、暑

十時半研究所へ。正午「津軽の海村」ノート三冊一応纏まる。大藤氏と暫く語る。

【聾の神】民間信仰のこと。聾の神は音をたてる事が主だらうといふ見解一致、幼児の氏神参りの際泣かせることなども関係あるべし。片目隻脚など神形異態の様式かともいはれる。地方研究団体経営のことなど語る。午後柳田先生にノートのこと報告し校閲を願出たるに一読後校閲者に瀬川女史を指名せられ特にその旨女史へ通信のこと鎌田嬢へ語らる。川端豊彦氏（千葉大勤務。東京都小金井町北関野三〇五）と語る。弘前高校出身。津軽民俗購読申込まる。鈴木清造氏と同窓の由、十三、中井氏と知人、木村繁四郎翁のことなど語る。鎌田嬢方言アクセント採集のこと語る。

午後七時半瀬川女史を訪問（千代田区富士見町一ノ十二、井村氏方）、ノート校閲を乞ふ。「私が先づ最初の愛読者になりませう」といふ。見島関連のこと話す。この次は東北でなしに一足飛びに九州西海岸へでも採集したらよからうといふ事。

【北小浦民俗誌】柳田先生の「北小浦民俗誌」が海村の社会や漁業の民俗学的研究の極地だらうと語らる。女史夫君（秋田鹿角出身、芸芸大教

授）と語る。九時辞去。

けさ桜庭武則氏より東奥日報送り来る。七月十四、十五、十六日附夕刊マガジ座談会記事頗る面白し。八月十三日附に工藤規氏十三の砂山踊のこ
と其他考証あり（余の記事引用）。

発 井浦芳信、木村勝代

受 桜庭武則、東□四郎、菊地久雄、壬生田昭三郎

八月十八日（金）晴、暑

十一時研究所へ。辞書編輯会議、大藤、大間知、堀、直江、和歌森、井之口諸氏。直江氏に「津軽の海村」ノートの顛末報告。大間知氏の發議にて二十日（日）の女の会へ出席の瀬川女史より右ノートを直江、和歌森両氏にて読むこと、なる。

堀氏と語る。同氏九月十日より二十日頃まで庄内より津軽東部のイタコ調査したきにつき、調査の便宜計り呉れるやうとの事なり。同氏の調査の要点は

- ① イタコの修行の問題 庄内の例に師匠より皆伝の折、死装束をつけ仮死の状態に陥りたるを水をかけて甦らせ、生誕式の如きことありと
- ② イタコ分布と師弟の系列
- ③ なほ火葬土葬の地域的現行状態。土葬の際、隠亡の存在有無などの諸点なり。夫々事前に予め調査しておくべき事なり。尚同氏來弘

の機に談話を開く要などあるべく、この点予め神、松木両氏へ本日通知し置けり。昼食後西瓜出る。研究所のスクラップにある「村の話」摘録。八ノ太郎の話面白し。八は山の神の八などと同じことなるべし。

帰宅後入浴。夜仙秀邸へ。「たけくらべ」につき教示を蒙る。

【惜春帖】「惜春帖」一冊、之は惜しいから貼る（春）といふことなりと。宗理、歌麿、廣重などの小点もの交貼り帖なり。中に「重信」あり。未だ紹介せられざる浮世絵師なりといふ。金沢名産の菓子饗せらる。帰宅十一時。

発 桜庭武則、菊地久雄、松木明、神良治郎

八月十九日（土）晴、暑

十一時研究所へ、大藤、直江、井ノ口氏。旅傳及方言を読む。

二時半渋谷へ行き東横にて菓子折求む。帰宅後洗濯二点。

午後八時能田女史訪問。井ノ口氏居らる。この夜齋藤吉彦氏追憶談にて興深し。九時半帰宅。

発 桜井冬樹、祖父□洋子、高橋義雄

受 桜井冬樹 速達加賀衆出稼のこと

八月二十日（日）晴、時々驟雨、夜曇

【大音寺】十一時浅草へ田原町より北へ三輪車庫の手前龍泉寺停留所左側に浄土宗大音寺と標札あれど戦災の為墓地のみなり。鷲神社も戦後の再建にて侘し茶屋町通りより見返り柳に佇み六区に抜け広小路松坂屋にて佐渡味噌を求む。稲荷前より御茶水に出で五時帰宅。夕食後洗濯五点入浴。

受 本木栄一

八月二十一日（月）晴、驟雨、夜曇る

朝洗濯六点、区役所出張所へ異動転出証明書の為め午前午後とも往復。

夕刻代田橋附近古書店にて今和次郎氏著「草屋根」、瀬川女史「海女記」求む。夜寺八氏方にて談る。

受 桜庭武則、工藤りやう、菊池完一、渡辺邦輔、鈴木実、三谷栄一、井浦芳信、

発 桜庭武則、三年一組生徒、三谷栄一、木村仙秀

八月二十二日（火）晴、暑

十二時半大阪商船ビル二階山加電業社長加山弘氏を訪問挨拶。銀座神田を巡り五時帰宅、入浴後高橋先生へ挨拶

受 相磯貞三

発 菊池完一、井浦芳信

【遠野物語初版】神田九段寄某書店に遠野物語初版あり五〇〇円。

八月二十三日（水）晴、暑

午前一〇時瀬川女史を訪問。山梨葡萄一折持参。校閲頂いたノートの謝辞を述ぶ。女史の話

① 採集の方法と態度は全く同感です

② 漁村の成立といふことを考へたい

③ 或る村落だけでなしに海岸の一定周辺を歩いたことの記録はこれまでなかった然し更に特殊な地点を選んで村落中心の変遷、更に個人の生涯を記録すべきだと思つてゐる。これは柳田先生も話されることだ。

④ 鱈漁の網下し祝に顔に漆を塗ることは予祝の意味だらうと先生も云はれた。

真澄遊覧記にニゴムといふ言葉があるとも申された。化粧と関連があ

○トラサマ

田中の寅といふ男、大鼓を打つて祈禱する。狐を祭るといふ。

八月二十四日(木)曇、驟雨

十時半地下鉄にて上野へ。十二時武蔵野線桜台下車にて相磯貞三氏(慶大、経済学部助教授)を訪問。昼食後饗応せられ久々に種々懇談。夕刻驟雨の為引止められ夕食を喫し、日本文学者総覧原稿と編纂の苦心談を聴く。

八時辞去九時帰宅

受 桜庭武則 東奥と葉書、鈴木実、松本八四雄、幾代書留

八月二十五日(金)曇。

九時半渋谷大阪銀行にて小切手全額受領。新宿伊勢丹、三越にて土産求。切符を購む。帰宅後沼袋へ布団返却し五時帰宅。荷造梱包。

発 幾代、桜庭武則、松本八四雄。

八月二十六日(土)晴、暑

朝、中野芳之助君よりリヤカーを貸り東北沢駅にチッキを出す。重量三十二キロにて二百余円とられ、駅止となる。

十時半研究所へ。けふは鎌田嬢のみなり。

柳田先生へ帰郷御挨拶せんとしたるに二階の書齋に招ぜられ十一時十分より○時半までいろ／＼お話をきく。タバコピースを褒められ、先生マツチにて灯火。「この箇所のみインクの色が異なる。後筆か。」

○津軽地方の郷土研究団体の動向、研究者の動静

小井川氏、うとう種市氏、むつ同人のことなど

○瀬川氏の「津軽の海村」批評について

九州へゆくことは東北の人間には生涯に一度もあればい、方だ。それは理想論でそうあることは望ましいが容易ではあるまい。先づ知友を求め資料を交換し合ふことが第一である。

○津軽の海は嘗て頗る豊漁だったらしいから、きっと農民でも漁にあらがれて海に住むものが出たことだらう。

○鱒の碑が秋田にある。

○ハチといふ神の呼名は注意すべきだ。山子が八助をつくるといふことは七の数を八にするといふこの考は新しい。むしろ八ノ太郎とは関連するだらう。

○聲の神はやはり神の恩恵を独占しやうといふ考からだらう。エビスと大黒は同じ神で二つにすることから、大黒を考へたのだ。大黒を祀る日は九日だといふが関西では子ノ日大黒といつてゐる。神の異形とはどうだらうか。赤子の氏子入りとは違ふだらう。

○鹿島流しの鹿島は佐竹氏が常陸にゐたからだと考へてゐる。鹿島踊りといふのがないか、弥勒云々といふ歌詞の歌があれば鹿島踊りと関連がある。

○太田南畝の「一話一言」にある津軽の鼠の移動についての話からヒントを得て今鼠のことを考へてゐる。鼠に関する俗信、作物に対する被害、鼠を避けやうとする精神的な作用など知りたい。大国主命の根の国も近世の国学者の解釈の如く地下の国ではなく、鼠ネの国と関係があらふと思つてゐる。

○民俗学研究には常に「日本の」為にするといふ考を忘れてはならない。

高橋嬢と民俗学研究所同人の動向、この学問の将来などにつき暫く語る。先生の仰せにより先生蔵本のうち「葬送習俗語彙」「民俗座談会速記」「山村生活調査」第二回報告書「羽州羽黒山中興覚書」(戸川安章校註)抜刷、「尋常人の人生観」「神社のこと」を頂く。二時半辞去。

能田女史を訪問し、同所11号室に合宿中の大間知、大藤、堀、直江、井之口諸氏に離別の挨拶し、能田女史に挨拶をなす。五時堀、直江両氏と共に同所を出で西荻某喫茶店にて直江氏より「津軽の海村」の寸評をきく。なほ和歌森氏と読みたきにつき堀氏津軽へ赴くとき持参せらるべしといふ。五時半駅頭にて別る。

七時高瀬氏方を辞す。守八氏、長屋一同、高瀬氏に夫々挨拶し出づ。

八時仙秀先生方に参り挨拶。十時沼袋着、入浴、就寝。

仙秀先生著草稿中艶隠者地名考、西鶴語彙など見る。

八月二十七日(日) 晴、暑

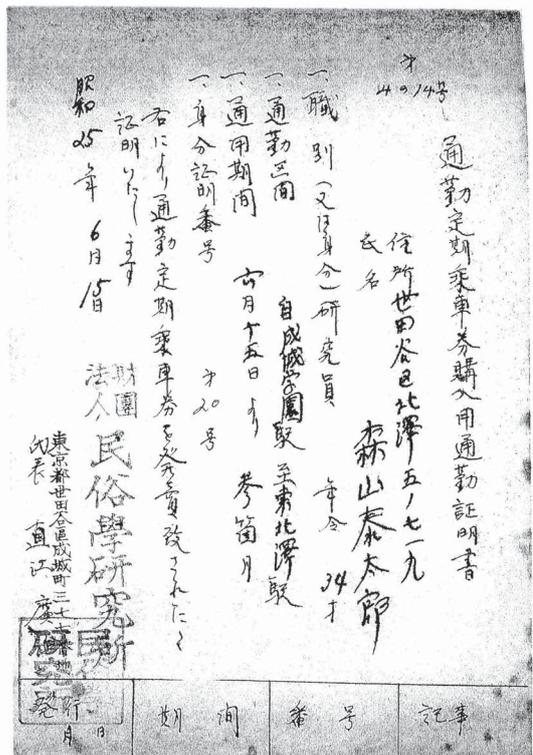
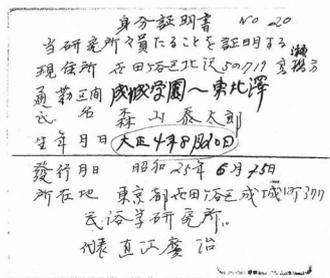
二時沼袋出発上野駅に赴く。午後六時五分発常盤線夜行列車にて離京。車中藤代―取手間の小貝川氾濫による田畑の被害惨状を見る。

八月二十八日(月) 曇

午前九時二〇分遅れて青森着、九時四〇分発奥羽線にて十時五十分弘前着。

(通勤定期乗車券購入用通勤証明書 添付) [下図]

(身分証明書 添付) [下図]



(二〇一四年五月二〇日受付、二〇一四年七月二八日審査終了)

(国立歴史民俗博物館研究部)